第3回
福岡県グローバル青年の翼
Global Wings of Fukuoka Youth
2018 報告書

“Think Globally, Act Locally”

INDEX

page	
2	知事あいさつ
3	団長あいさつ
4	事業概要
5	事務局・団員名簿
6	第１次研修
7	第２次研修（フィールドワーク）
9	第３次研修
10	第4次研修 海外研修 日程表
11	第４次研修（海外研修）
25	第５次研修
26	副知事表敬
27	第６次研修（フィールドワーク）
29	団員レポート
42	事務局から一言
43	募集要項
44	Special Thanks to
45	Snapshots with Message

知事あいさつ

国際的な視野を持ち、地域で活躍する人財の育成を目指して

福岡県知事
小川　洋

近年、超高齢社会、人口減少社会の到来、経済のグローバル化の進展などにより、社会の基本的な構造や生活様式が大きく変化しています。
このような中、それぞれの人は自分らしい生き方を実現するとともに、多様な人々と共に経験したことのない課題を解決しながら、将来に夢や希望の持てる活力ある社会を創造してくことが重要です。

これからの福岡県、そして日本の発展を考えると、“Think　globally,　act locally” 国際的な視野を持ち、地域で活躍をする「人財」の育成が必要です。

このため県では、躍動するアジアの現状を体感し、現地で活躍する人たちとの交流などを通じて、グローバルな視野を備えた青年リーダーを育成する「福岡県グローバル青年の翼」を実施しています。

今年度は24人の若者たちがミャンマーとマレーシアを訪問し、現地の若者たちとの交流や、現地に進出している国内企業、日本型の農業技術普及に取り組む国際NGOの方々との意見交換を行うとともに、両国の小学校やマレーシア政府観光局などを訪問し、自ら設定した「人材育成・教育」「観光・食」をテーマに自主研究活動を行いました。

また、海外研修の前後には、アジアの現状や福岡県の歴史、途上国に進出している県内企業や、循環型生活の普及に取り組むNPOの活動について学んだほか、団員自らが企画し、企業やICTを活用する高校を訪問するなど、フィールドワークにも取り組みました。

これらの経験は参加された団員の皆さんにとって、貴重な体験であり、かけがえのない財産になったことと思います。団員の皆さんが、この「福岡県グローバル青年の翼」で学んだことを糧に、地域の青年リーダーとして活躍されることを、心から期待しています。

県では引き続き、未来を担う「人財」の育成に取り組んでまいります。皆さまのご理解、ご協力をお願いします。

最後に、本事業の実施に当たり、ご尽力いただいた福岡県グローバル青年の翼実行委員会をはじめとする関係の皆さまに心から感謝申し上げます。

団長あいさつ

学び、体感し、交流した経験と友情を財産に今後の成長と活躍を期待します

団長　私学振興・青少年育成局長
野田　律子

平成30年度「福岡県グローバル青年の翼」は、9月上旬の第1次研修から始まり、テーマ別の第2次研修、渡航直前の第3次研修を経て、11月4日から11日までの7泊8日の日程で、ミャンマーとマレーシアの2か国を訪問しました。

ミャンマーはアジア最後のフロンティアと称され、経済発展が期待される国です。まず、オイスカのパコック研修センターを訪問し、ミャンマー中部の痩せた乾燥大地が、長年の日本の技術協力により緑豊かな農地に変わっていることを体感するとともに現地農業も体験しました。さらに将来の農村青年リーダーたちとの共同生活、近隣の小学校や村の訪問と交流を通じ、団員の皆さんは大きな刺激を受けるとともに、異文化の壁を越え友好関係を築く素晴らしい時を過ごすことができました。また、ヤンゴン郊外にある本県出身戦没者を弔う「福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑」を訪問し、献花を通じて団員全員があらためて平和の尊さを感じることができました。

次に訪問したマレーシアは、多くの民族・文化・宗教が共生する多民族国家です。首都クアラルンプールでは、人種や言語が異なる子どもたちが共に学ぶ華人系小学校や様々な国から留学先として注目を浴びつつある大学を訪問し、教育現場の違いを学ぶとともに、共に授業を受けるなど現地の生徒たちと触れ合うことができました。また、政府機関からマレーシアのインバウンド政策についてのレクチャーや、イスラム社会の中で奮闘する日本企業のハラル戦略の見聞等、非常に高いレベルの視察を実施することができました。

事前の国内研修で、福岡県を拠点に活躍する方々から専門性の高い講義を受け、企業や教育現場でのフィールドワークで研究を行っていたからこそ、訪問先で深く掘り下げた質疑を行い、学びを深めることができたのではないでしょうか。

ミャンマーとマレーシアは経済的な発展状況は対象的な国でしたが、地域のために活動する現地の方たちと交流し、その情熱に触れ、感銘と刺激を受け、多くのことを経験する貴重な機会であったと思います。

最後に、半年に及ぶ研修を通して学び、体感し、多くの方たちと交流した経験、そしてなにより一緒に頑張った団員仲間との友情は、これからの人生にとってかけがえのない財産になることと思います。団員の皆さんが今後さらに成長され、それぞれの地域や職場で活躍されることを心より期待しています。

福岡県グローバル青年の翼(2018) 事業概要

1 趣旨・目的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

2 概　　要

(1) 団員　24名

(2) 研修内容

① 第1次研修(宿泊)
9月8日(土)～9日(日)
郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等

② 第2次研修(フィールドワーク)
①と③の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察

③ 第3次研修(宿泊)
10月20日(土)～21日(日)
訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等

④ 第4次研修(海外研修)
11月4日(日)～11日(日)
現地企業や教育機関、文化施設の視察、現地で活躍する日本人との交流等

⑤ 第5次研修(宿泊)
12月8日(土)～9日(日)
海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等

⑥ 第6次研修(フィールドワーク)
⑤と⑦の間の任意の日
海外研修を受けての県内実践活動

⑦ 報告会
3月21日(木・祝)「ふくおか若者魁大会」
研修成果報告会

(3) 海外研修　**日　時**　平成30年11月4日（日）～11日（日）　7泊8日

訪問先　マレーシア（クアラルンプール）、ミャンマー（ヤンゴン、バガン、パコック）

(4) 参加資格　平成30年4月1日現在で、満18歳以上35歳以下の県内居住者
(企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的視野を身につけ、企業・団体等の中核となって活躍する青年リーダーを目指す者)

(5) 実施主体　福岡県グローバル青年の翼実行委員会
(福岡県、福岡県青少年団体連絡協議会、(公社)福岡県青少年育成県民会議、(公財)福岡県国際交流センター、(公財)オイスカ西日本研修センター、NPO法人ふくおかNPOセンター、青年の会、JETRO(日本貿易振興機構福岡貿易情報センター))

事務局・団員名簿

氏名	所属・職業		役職
野田（のだ）　律子（りつこ）	福岡県私学振興・青少年育成局	局長	団長
藤川（ふじかわ）　為廣（ためひろ）	福岡県私学振興・青少年育成局	青少年育成課　事務主査	スタッフ

班	氏名	所属・職業			役割	テーマ別
1班	江頭（えがしら）　一記（かずき）	社会人	田中藍株式会社	第一営業本部 久留米営業部	リーダー	人材育成・教育
	柏原（かしわばら）　智香（ともか）	学生	九州大学	理学部　物理学科	記録	人材育成・教育
	河村（かわむら）　健利（けんと）	社会人	杉村包装資材株式会社	営業部	記録	観光・食
	北村（きたむら）　空（そら）	学生	北九州市立大学	外国語学部 国際関係学科	報告書編集	人材育成・教育
	城戸（きど）　夏葵（なつき）	学生	西南学院大学	国際文化学部 国際文化学科	企画	人材育成・教育
	佐々田（ささだ）拓実（たくみ）	学生	九州産業大学	商学部　観光産業学科	企画	人材育成・教育
	竹井（たけい）　大善（ひろよし）	市町村	柳川市役所	産業経済部 農政課　振興係	報告書編集	人材育成・教育
	田島（たしま）　里歩（りほ）	社会人	社会福祉法人あさくら会 ひろにわ保育所	保育士	サブ・リーダー	観光・食
2班	緒方（おがた）　康起（こうき）	社会人	株式会社福岡銀行	大善寺支店	リーダー	観光・食
	河野（かわの）　亜美（あみ）	学生	福岡女学院大学	国際キャリア学部 国際キャリア学科	企画	観光・食
	倉吉（くらよし）　孝道（たかみち）	市町村	久留米市役所	市民文化部 文化財保護課	企画	人材育成・教育
	高岡（たかおか）　伴成（ともしげ）	社会人	タカ食品工業株式会社	製造部　包装課	報告書編集	観光・食
	永岡（ながおか）　拓実（たくみ）	学生	九州大学	教育学部	記録	人材育成・教育
	平川（ひらかわ）　綾夏（あやか）	学生	中村学園大学	流通科学部　流通科学科	記録	人材育成・教育
	八尋（やひろ）　万葉（まよ）	学生	西南学院大学	経済学部　経済学科	サブ・リーダー	観光・食
	山中（やまなか）　優貴（ゆうき）	社会人	九鉄工業株式会社	北九州支店　建築課	報告書編集	人材育成・教育
3班	河村梨南子（かわむらりなこ）	学生	北九州市立大学	外国語学部 中国学科	記録	観光・食
	貴島（きじま）　道拓（みちひら）	社会人	トヨタ自動車九州株式会社	品質管理部	サブ・リーダー	観光・食
	高橋（たかはし）　奈歩（なほ）	学生	福岡女学院大学	国際キャリア学部 国際キャリア学科	リーダー	観光・食
	田中（たなか）　英哲（ひであき）	社会人	九鉄工業株式会社	北九州支店　土木課	記録	観光・食
	中村（なかむら）　晴香（はるか）	学生	中村学園大学	流通科学部 流通化学科	企画	人材育成・教育
	野田（のだ）　健次（けんじ）	社会人	イケア･ジャパン株式会社	福岡新宮ストア セールス部門	報告書編集	人材育成・教育
	二嶋（ふたじま）　晃平（こうへい）	学生	九州大学	経済学部 経済・経営学科	企画	観光・食
	村上（むらかみ）　侑希（ゆき）	社会人	株式会社福岡銀行	西新町支店	報告書編集	観光・食

第1次研修

於：福岡教育社会教育総合センター
2018年9月8日(土) ～ 9日(日)

知らないことを知る喜び、膨らむ好奇心、初めて出会う仲間たちと共に新たな世界へ！

何度も読み返した去年の報告書。今日から私があの場所に行くんだと、期待と不安を胸に抱き、福岡県グローバル青年の翼・第1次研修会場に向かった。集合場所は小さな研修室。扉を開くと皆の緊張が空気を通して伝わり、気が引き締まった。

初日の午前中は、日本貿易振興機構アジア大洋州課北見創様より、「マレーシア及びアセアンの概要について」、中村学園大学教授占部賢志様より、「世界の中の日本～グローバル・ヒストリーの視点から～」についての講義を頂いた。北見様の講義では、マレーシアとASEAN（東南アジア諸国連合）の一般概要、南アジアの急速に変化する経済成長についてとそれに伴い増加する日本企業の海外進出、そして無限の可能性を秘めたマレーシア経済の展望について知ることができた。占部様の授業では、日本を世界から見ることにより、国際社会においての日本、または日本人としての自分を見つめ直す機会を得ることができた。

午後の講義では、田中藍株式会社常務田中克明様より、「グローバル戦略と人材育成」について、公益社団法人福岡県観光連盟観光推進プロデューサー豊島茂様より、「九州・福岡の観光戦略」についての講義を頂いた。田中様からは、海外での事業展開とその理由について様々な統計データをもとに丁寧に教えて頂いた。また、人材育成の面では、より多くのビジネスチャンスを得ることができるように、語学留学など社員一人ひとりのスキルアップを図る制度を独自に設けているというお話を聞いた。そして、豊島様からは福岡の観光動向や展開していく観光事業の戦略を知ることができた。また、イベントリスクの高い観光産業ではその時代のニーズに見合ったアイデアを取り入れることが重要であり、そのためには急速な時代の変化の中で流行の兆しを正確に捉える力が必要であることが分かった。

一日目の講義はあっという間に終わり、その後は生活班での活動に移った。はじめに役割分担、次にミャンマーで行われる夕食交流会の出し物について話し合い、皆これから始まる研修に胸を弾ませ楽しみにしている様子だった。一日の締めくくりとして夜には、県職員の方々と団員全員を含めた懇親会が開かれた。一人ずつ自己紹介をしていき、それぞれの夢、仕事などについて語り合ううちに皆の緊張はやわらぎ、今日あったばかりとは思えないほど打ち解けていた。

二日目の午前中は、ビジネスデザインラボ代表神田橋幸治様より、「ベンチャー支援の現場から見た、福岡地域の可能性」、辻利茶舗代表取締役辻史郎様より「スタンスはローカル、ビジョンはグローバル」と題したご講義を頂いた。神田橋様からは、イノベーション都市として注目を集めている福岡地域について、また産学官民が連携し"質"を重視した成長を目指す福岡地域の将来の可能性、そしてベンチャー企業に対する支援体制について教えて頂いた。辻様からは、辻利茶舗の歴史やコンセプトに沿って国内外問わずに、"茶"を通してその地域や文化に本気でコミットしている姿を紹介して頂き、寛容度と多様性を備えた人間性を身につけるためには国内、または国外の様々な"地域"で経験を積み多くの人と関わることが大切であるということを学んだ。

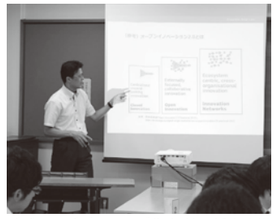
その後は、テーマ別の班に分かれ、第2次研修のテーマ別訪問先決めを行った。テーマは同じでも、皆の関心のある分野が異なるため研修先を一つに絞るのに苦労した。お互いの意見を考慮しながら話を進めていき、共通点を見つけ、今後の方向性を決めることができた。

こうして、二日間にわたる第1次研修が終了した。二日間で行われた６つの講義は、知らないことばかりで、新しい知識を得ることの楽しさを感じた。また、団員の団結力も身につき、次回の研修への期待が膨らむ研修だった。

（文責:城戸夏葵）

講義名	講師	
「マレーシア及びアセアンの概要について」	北見　創	日本貿易振興機構 アジア大洋州課
「世界の中の日本～グローバル・ヒストリーの視点から～」	占部　賢志	中村学園大学 教授
「グローバル戦略と人材育成」	田中　克明	田中藍株式会社 常務
「九州・福岡の観光戦略」	豊島　茂	(公社)福岡県観光連盟 観光推進プロデューサー
「ベンチャー支援の現場から見た、福岡地域の可能性」	神田橋幸治	ビジネスデザインラボ代表
「スタンスはローカル、ビジョンはグローバル」	辻　史郎	株式会社辻利茶舗代表取締役

株式会社辻利茶舗代表取締役 辻史郎様


ビジネスデザインラボ代表 神田橋幸治様

名刺交換をする団員

夕食交流会の出し物を考える団員

第2次研修（フィールドワーク）

2018年10月　4日(木) **私立明光学園中・高等学校**
2018年10月11日(木) **株式会社麻生**

人材育成・教育チーム

学校と企業のグローバル教育～自分の人生にオーナーシップを持てるアクティブラーナーを育てる！

近年、訪日外国人の数は右肩上がりで、2019年4月から新設される在留資格「特定技能」によって、毎年数万人の外国人が日本に移り住み、働くことになる見込みだ。

そこで、私たち人材育成・教育チームでは、既にグローバル人材の育成に取り組んでいる企業の現場を視ると同時に、学校教育現場における授業スタイルの変化も探ることにした。

私立明光学園中･高等学校

大牟田市にある私立明光学園中・高等学校で行われているアクティブラーニング型授業及びICT活用は目を見張るものがあった。

前川先生の「日本史」の授業では、私たちも生徒と一緒に授業を受けた。班ごとに配布された歴史資料を題材に、資料から読み取れることを考えて付箋に意見を書き出して発表。黒板に映像を投影し、紙製クリッカーを用いた意表を突くクイズを導入することで、生徒は主体的に授業に参加していた。

歴史を自分とは関係のない過去の出来事として終わらせるのではなく、例えば「鎌倉時代に宗教が流行った理由」を考察した後は、「そもそも、なぜ人は宗教を信じるのか」といった普遍的なことを考える力を身につけるような発問がなされていた。

スモール先生の「英語」の授業では、iPadとロイロノートというソフトを用いたICT活用授業が展開されていた。問題も解答も配信で行うため、配布時間や回収時間が削減されている。解答はスクリーンに表示され、任意の解答を並べて比較可能。機器に頼るだけでなくペアトークも実施し、「読み」「書き」「話す」「聞く」の4つの力を満遍なく伸ばす工夫がなされていた。

多様な意見を尊重し、自分の意見をはっきり述べることを大切にしているところに、私たちが学ぶべきことがあった。

株式会社麻生

株式会社麻生では、社員と地域の方への取り組みを2つ行っている。

社員への取り組みでは希望を募り、「学ぶ」ビジネス英語、「使う」実践英語、勉強会、海外研修を行っている。英語を「学ぶ」だけでなく「使う」機会を提供。参加人数が3倍に伸びた。実践英語では、社員のモチベーションを保つために外国人学生、インターン生、麻生専門学校の生徒も参加し英語でインタビューをし英語を「使う」ことに重点を置いている。また社内でTOEIC試験を行うなど、日本で働きながらも、英語を身近に感じ得れるように様々な取り組みが行われている。

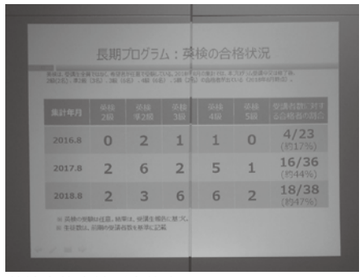
地域の方への取り組みとして小学3年生～中学3年生までを対象にして英語プログラム（短・長期）を実施している。生徒の中にはアクティブラーニング型学習のおかげで英語が面白いと思えた子もいるそうだ。効果として中・上級クラスの生徒の英語力が向上し、TOEICの点数が6割の子で100～300点上がり、英検でも2級に小学4年生の子が合格したそうだ。

このように株式会社麻生では、社員にも地域の方にも英語を学ぶ機会を与えることによってグローバル化している社会に対応していく人材を育成していることが分かった。このことを海外研修でも活かしていきたい。

（文責:倉吉孝道・中村晴香）

「日本史」KP法による板書

「英語」iPadによるICT活用



英検合格実績（合格率17%→47%）

担当の石松様と松下様から説明を受ける団員

第2次研修（フィールドワーク） 2018年 9月27日(木) **福岡県観光連盟** 2018年10月15日(月) **キャナルシティ博多** 食・観光チーム

東南アジアから安心して来られる福岡を目指して

食・観光チームでは、今回の研修で訪れる東南アジアに目を向け、訪日観光客で増加を続けている福岡県の魅力を海外の方に発信し、より多くの方に来てもらいたいという想いから、「東南アジアの観光客が安心して楽しめる福岡」をテーマに福岡県のインバウンド対策の現状や課題等を学ぶことにした。

福岡県観光連盟

福岡県観光連盟では、観光推進プロデューサーの豊島茂様に話を伺った。福岡への観光客について、現在の入国者数は過去最高値を更新している。国別に見てみると、韓国が大半を占め、その他も東南アジアの国の名前が挙がる。

東南アジアからの訪日観光客が増加する中で、東南アジアにはイスラム教徒も多いことから、今後福岡でもイスラム教徒への更なる対応が求められてくる。話を聞く中で、“ハラル”(許された行為・物)というキーワードから、観光連盟では様々な対応をされていることを知った。例えば、飲食店のメニュー表記用に「NON PORK」「NON ALCOHOL」シールを配布し使用を呼びかけている。ネットでは、福岡県のムスリムフレンドリー推進店一覧を見ることができる。多言語対応について、観光客と観光施設との円滑なコミュニケーションを支援するため、「よかとこコールセンター」を開設し、15言語に対応した電話通訳サービスを行う。

NON PORK、NON ALCOHOL のシール

福岡県観光連盟　豊島様との記念撮影

福岡の情報発信の方法として、旅行会社向けセミナーや日本フェア等を開催している。現地のブロガーや雑誌編集者等発信力のある人を招待し、SNSでの発信も活用している。国ごとに好み（アニメ・花・食・買い物等）も違い、より深いものを求めるリピーターが増えている。

キャナルシティ博多

キャナルシティ博多では、広報・インバウンド担当の津留佳奈恵様に、訪日観光客への取り組みや現状について話を伺った。外国人観光客は約2割で、その内9割が東アジアの方であった。これは、福岡空港におけるLCCの増便により、韓国人を中心とした訪日外国人の来場の増加等が理由として考えられる。

言語対応については、日本語・英語・韓国語・中国語（簡体字・繁体字）に対応している。総合インフォメーション等には、多言語対応スタッフが在籍し、外国人スタッフが働いている店舗もある。日本人スタッフのみの店舗には、ツーリストラウンジから応援して対応し、連携を図っている。SNSについては、各国に合わせた主要なSNSを開設し、情報発信を行う。編集センスも宣伝の鍵となるため、写り映えの良い写真を取り入れ改良を続けている。また、決済サービスについては、取り扱い数を増やし、決済環境の拡充に努めている。

イスラム教徒への対応について伺うと、キャナルシティ博多に訪れるイスラム教徒の人数は少なく、ハラル対応の食事や礼拝所を求める声は年数回であることから、検討するものの、導入には至っていないとのことだった。

今回の訪問を終え、東南アジアの方に福岡へ安心して来て頂くためには、ムスリムを含めたグローバルな視点で物事を考えていく必要性を感じた。福岡に住む私たちは、観光客の方に福岡の魅力を発信すると共に、受け入れの体制を整える必要がある。海外研修を通し、観光・食についての現状を知っていきたい。

(文責:田島里歩)

キャナルシティ博多　津留様との記念撮影

第3次研修 於：福岡県立社会教育総合センター 2018年10月20日(土) ～ 21日(日)

ミャンマー、マレーシアの現状や海外から見た福岡について学び、海外研修に向けた最終準備を行った。

第2次研修のテーマ別ごとのフィールドワークを経て10月20日（土）・10月21日（日）の二日間第3次研修が行われた。第3次研修ではまず（公財）オイスカ西日本研修センターの豊田敏幸様からミャンマー・パコックの研修センターについてお話しいただいた。オイスカはまず1961年「すべての人々が様々な違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指し創設された。そして1997年にパコックに研修センターを開所。研修生はミャンマー全土から集まり、有機農業、畜産、食品加工等の技能を身に付ける。その他にもオイスカの地域開発事業、環境保全事業の20年間の成果を聞き実際にミャンマーに訪問できる日が待ち遠しくなった。

続いて西田精麦株式会社の長根寿陽様よりミャンマーでの薬用植物栽培によるバリューチェーンの構築についてお話をいただいた。ミャンマーは広大な国土があるため、その地域にあった農作物を栽培する必要があることを知った。またミャンマーの気候や農業人口に起因する農業の可能性をこの講義で学ぶことができた。少数民族支援のための置き薬事業や麻薬の原料の生産に代替する蕎麦の生産の提案などは、ビジネスとして持続可能でありながら地域住民の生活改善を促す革新的な試みであると思った。

続いてL&L Consultant Founder&DirectorのW.Y.LIM様より政変後のマレーシアとそのビジネス環境の変化についてお話いただいた。まずLIM様は日本語、英語、中国語、マレー語を話すことができASEANを中心にビジネスマッチングや海外進出の手助けを行っていることを知りグローバル人材を目指す私たちの目標ともいえる方であった。お話していただいた内容はマレーシアの国土、時差、気温の基礎的な情報と政治・経済状況についてである。1957年の独立後以来、与党連合の支配が続いたマレーシアで初の政権交代が実現し2018年から2度目となるマハティール首相が就任し今後さらなる日本とマレーシアの関係が親密になることが予想されることを知った。日系企業から見てマレーシアは親日的、政治の安定、国民の語学力も高いため投資先としてマレーシアの魅力が高まっていくであろうと感じた。また「住みたい国」12年連続世界第一位の国でもあることから今後さらに国内消費が増加し国力上昇が見込まれることから、ますますマレーシアに行ってこの目で現地を見てみたいという気持ちが高まった。

その後2日目のテーマ別フィールドワークの成果発表の準備を行い、共有された学びをいかに海外研修に活かせるかを考えた。

2日目はIT&IP Strategy AdvisoryのAldo Bloise様、みずトランスコーポレーションの水谷みずほ様より海外から観た福岡の魅力と課題の講義とその後団員の前での英語スピーチの練習、指導が行われた。諸外国からのアクセスが良くコンパクトで若年層の力がある都市である福岡は『Challenges(課題)』に立ち向かうことによってもっと福岡は魅力的な都市になることを知った。また英語スピーチの練習、指導では英語が苦手な団員、得意な団員もいる中団員全員の前で英語で自己紹介を行った。得意、不得意関係なく自信を持ってスピーチをすることがなによりも重要であることを学んだ。

その後はテーマ別ごとに行ったフィールドワークの成果発表を行った。人材育成・教育グループ、観光・食グループともに情報を共有し、質疑応答を行ったことで今後の県内実践活動の課題を見出すことができた。

そして第3次研修の最後に結団式が行われた。講堂の張り詰めた空気の中団員一人ひとりに団長より団員証が授与された。2週間後に海外研修を控え、国内研修で得た知識を自分の目で見ることができるという気持ちが膨らむ瞬間であった。

(文責:緒方康起)

講義名	講師
「ミャンマー・パコックの研修センターについて」	(公財)オイスカ西日本研修センター 豊田　敏幸 様
「ミャンマーでの薬用植物栽培によるバリューチェーンの構築について」	西田精麦（株）　新規事業推進室 室長 長根　寿陽 様
「政変後のマレーシアとそのビジネス環境の変化」	L&L Consultant Founder&Director W.Y.LIM 様
「海外から観た福岡の魅力と課題」「英語スピーチ指導」	IT&IP　Strategy Advisory Aldo Bloise 様 みずトランスコーポレーション 水谷みずほ 様

(公財)オイスカ西日本研修センター 豊田　敏幸様

西田精麦(株)新規事業推進室 室長　長根　寿陽様

L&L Consultant Founder&Director W.Y.LIM様

IT&IP　Strategy Advisory Aldo Bloise様 みずトランスコーポレーション 水谷みずほ様

テーマ別視察に向けてのワークショップ

結団式にて団員証が授与された

日程表

日次	月日(曜) DATE	都市名 CITY	現地時間 TIME	スケジュール SCHEDULE
DAY 1	2018年 11/4 SUN	福岡空港	08:45	国際線　2階
		福岡発	11:40	TG-649
		バンコク着	15:40	
		バンコク発	18:05	TG-305
		ヤンゴン着	18:50	
				ヤンゴン泊
DAY 2	11/5 MON	ヤンゴン発	07:00	K7-262
		ニャンウー着	08:20	
		エサジョ着	午前・午後	○現地の村や小学校訪問など
				○オイスカ研修センター視察、現地研修生との意見交換
			夜	○オイスカ研修センターでの夕食交歓会
				研修センター泊
DAY 3	11/6 TUE		早朝	○朝礼参加
			05:15	○研修センター周辺視察（マーケット等）
				○研修センター内で研修生たちと各種作業体験
				○研修センター近郊の町（パコック）視察
			午後	○バガン遺跡群見学
		ニャンウー発	17:50	K7-207
		ヤンゴン着	19:10	
			夜	○夕食会（ミャンマー在住の方3名ほど）　ヤンゴン泊
DAY 4	11/7 WED		08:00	○福岡県ミャンマー戦没者慰霊碑献花
		ヤンゴン発	11:20	MH-741
		クアラルンプール着	15:45	
				クアラルンプール泊
DAY 5	11/8 THU	クアラルンプール	09:30	○華人系小学校SJK（C）Kepong1
			13:00	○HDC：ハラル産業開発公社
			16:30	○おたふくソース・マレーシア
				クアラルンプール泊
DAY 6	11/9 FRI	クアラルンプール	09:00	○マレーシア政府観光局
			12:00	○SEGi大学
			16:00	○AppleVacation（旅行社）
			18:30	○マレーシア夕食交流会
				クアラルンプール泊
DAY 7	11/10 SAT	クアラルンプール	終日	○クアラルンプール市内・近郊視察 バトゥ洞窟、セントラルマーケット、独立広場、KLタワー、プトラジャヤなど
		クアラルンプール発	21:05	TG-418
		バンコク着	22:10	
				機内泊
DAY 8	11/11 SUN	バンコク発	01:00	TG-648
		福岡着	08:00	
				着後、解散

出発式・移動（福岡⇒バンコク⇒ヤンゴン）　11月4日(日)

新たな世界への旅立ち

2018年11月4日早朝。福岡空港の国際線に集まった団員たち。いよいよ始まる海外研修に期待感と高揚感を感じながら第3次研修以来の再会を喜びあっていた。すぐに出発式を迎え、「福岡県の代表としてだけでなく日本の代表として行く」という自覚を再度心に焼き付け、新たな世界へ旅立った。

フライト開始時刻が少し遅れるというアクシデントもあったが、6時間ほどのフライトを無事に終え、タイのスワンナプーム空港に到着した。慣れない長時間のフライトに少し疲れを感じつつも、空港内を少し探索しながらしばしの休息を取った。やはり福岡空港とは違い非常に大きな空港で免税店等の数も多く、タイのイメージに合うオブジェ等もありちょっとした場面でも海外というものを感じることができたが、福岡を出発する時間が少し遅れた為、タイでの滞在時間は短く、すぐにヤンゴンへ向け再び飛行機に乗り込み出発した。バタバタと飛行機の乗り継ぎをし、1時間15分ほどのフライトを終えるとミャンマーのヤンゴンに到着。日本の空港と違う雰囲気を肌で感じながら、この地からいよいよ始まる海外研修にワクワクしていた。

入国手続きを済ませ、空港の外に出ると日本とは違う気候の影響なのか、じんわりと汗も出てきて熱気を肌で感じ、改めてミャンマーに着いたのだと実感した。バスに乗り込み、明かりの少ない街を窓から眺めながら常に尋常ではないクラクションが四方八方から鳴り響き、車道を堂々と横切る人々。日本では考えられない光景に別世界を感じながらヤンゴン市内のレストランへ向かう。レストランでは中華料理を食べたが、日本で食べる中華料理とは違った見慣れない料理も多く、同じ中華料理でも日本向けの物とは違うという事を食事からも早速感じる事ができた。

食事を終えると現地のスーパーマーケットへ。日本でよく見る商品から、あまり見ることのない商品まで様々な物があったが、基本的にはレジ周りや購入時の対応等日本と大きな違いがあるようには見えなかった。各々が日本でも馴染みのある飲み物やミャンマーのお菓子等、お土産となる物や部屋で食べる物等ショッピングを楽しんだ。

ホテルに到着すると安堵感からか長い1日の疲れが出てきた。明日はオイスカ研修センターでの研修だ。いよいよ本格的に始まる研修に大きな期待とほんの少しばかりの不安を心に抱えながら、しばしの休息を取った。

（文責:河村健利）

福岡空港での出発式

出発前の集合写真

タイの空港で乗り換え便の時間を確認

ミャンマーのスーパーマーケットで買い物①

ミャンマーのスーパーマーケットで買い物②

ミャンマー／AM 移動・オイスカ研修センター　11月5日(月)

初めて訪れた異国の地で日本は憧れの国に。

４時に起床し、専用バスでヤンゴン空港へ。前日の夜に各班の出し物の打ち合わせをし、体もまだ馴染めていない中、ホテルの方が早朝から用意してくださったパンをありがたくいただき、気持ちよくホテルを出発した。朝日が出始め、明るい日差しが私たちを照らし始めた頃、ヤンゴン空港からバガン・ニャンウー空港へと出発した。移動手段はなんとプロペラ機！不安もある中、ワクワクドキドキを胸に機内に乗り込んだ。飛行機に乗る際に、夜の交流会で披露するための刀の小道具が没収されそうになるというハプニングもあったものの、それぞれ横に座った人と共に会話をしているうちにあっという間にニャンウーに無事到着した。その後バスでオイスカに向かった。外の景色は福岡ではなかなか目にする機会がないようなものばかりで、壮大な敷地で農業を行っている人の姿や建物が何もない更地に日本との違いを身にしみて感じた。

バスでの移動を終え、オイスカ・ミャンマー農林業研修センターに到着後、宿舎へと向かった。現地の方々は「ミンガラーバー」という日本のこんにちはと同じ意味の言葉を使い、笑顔で出迎えてくださった。印象深かったことは、トイレの違いに私たちが戸惑っていた時、優しく教えてくださったり、日本語で一生懸命話してくださったり、「ようこそ！福岡青年の翼」と手作りのメッセージを壁に掲げて歓迎を受けたことだった。本当に心からのおもてなしをしてくださる国だと心を打たれた。

現地での初めての食事は心温まる手料理だった。日本では食べることのできない川魚を使った料理や採りたての野菜を使ったスープなど大地を感じられる食事を味わうことができた。

センター内の案内の際、昨年は全員で稲作を行っていたが、今年は台風の影響もあり、養豚場、養鶏場、パン工場、農場を見学させていただいた。農作業がミャンマーの人の生活にどれだけの影響を与えているのかを知ることができた。パン工場では日本人から伝えられた製法で、ミャンマー人好みに試行錯誤され、作られたあんぱんが現地で人気ということから、日本の食が海外でも人気ということを知って嬉しかった。日本はこれからも尊敬され憧れの国であるために、もっとおもてなしの心や日本の良さを多くの国に伝える人材を育てていくべきだと改めて思い直させてくれる機会になった。

（文責:平川綾夏）

オイスカ研修センターにて歓迎のメッセージ

プロペラ機からの眺め

交流会で使用する小道具を一旦没収されることに…

現地での食事

養豚場にて子豚の様子

養鶏場のヒナたち

第１次研修 >> >> 第２次研修 >> >> 第３次研修 >> >> 第４次研修 >> >> 第５次研修 >> >> 第６次研修 >>
海外研修

ミャンマー／PM オイスカ研修センター・夕食交歓会　11月5日(月)

日本の技術と支援をもとにミャンマーの乾燥地帯を潤す現地の熱意と努力を知る

地元の小学校と機織りの村の訪問

オイスカ研修センターで昼食を頂いたのち、専用バスでSea Ywar Village Schoolに向かった。校門では、花道を作って待っていた生徒たちが私たちの到着を出迎えてくれた。この学校に通う小学生たちの踊りは、とても陽気で可愛らしかった。中学生の少年がオイスカ研修センターの植林プログラムに参加し、環境保護の必要性を学んだことを一生懸命話してくれた。オイスカ研修センターによる教育が、自然環境を長期的に管理する考え方のなかった村の意識を着実に変えつつあることを実感した。

バスが通れない道をトラックの荷台に揺られること約30分、Khin Mon Villageに到着した。この村は機織りを主な収入源にしている村である。オイスカ研修センターによるマイクロクレジット（無担保で少額の融資を行うサービス）を利用し、機織り機が購入できて、収入がおよそ倍に増えたそうだ。村のお母さんによると、日本からの支援により近くに小学校が作られたことが一番嬉しかったという。私たちはこの村でミャンマーの民族衣装ロンジーやシャツを購入し、村の見学をした。村人が織り成したミャンマーの刺繍は美しく、団員たちは思い思いの柄を見つけたようだった。

2つの村とも私たちは大歓迎を受け、オイスカ研修センターと村の厚い信頼関係が伝わってきた。

研修生との意見交換会と文化レクチャー

オイスカ研修センターの研修生やスタッフに彼らがセンターに来た理由を尋ねたり、お互いの国について教えあったりした。実家の農業を受け継ぐ覚悟を持った彼らはたくましかった。特に意外だったのは、日本の農業についてのイメージである。“機械を使用した大規模な農業”、“年齢を重ねても田畑を耕し続ける元気な高齢者”というイメージをもっていた。農業技術にも経済状態が大きく影響することを知った。日本の農業の後継者不足が、反対にプラスのイメージで伝わっていることに驚いた。

夕食交流会

ライトに照らされた夜の運動場で行われた夕食交流会。スタッフと研修生にご馳走を振舞っていただき、私たちのために用意してくれた日本風のカレーとコロッケは特に団員たちから好評だった。研修生たちは1カ月以上も練習して準備してくれたという5曲もの見事なミャンマーの踊りを披露してくれた。これは毎年アレンジが加わっていくそうだ。初めのうち、研修生たちは団員と話すことにためらいを感じているようだった。しかし、団員も入り混じって輪になってミャンマーの陽気な踊りを楽しみ、団員たちの出し物も佳境に入り、皆で手を繋いで最後のレクリエーションである人間知恵の輪に頭を絞る頃には完全に打ち解け笑顔が広がっていた。

（文責:柏原智香）

団員を出迎えてくれるSea Ywar Village Schoolの子どもたち

ミャンマーの少年は皆一週間ほどの出家を経験する

Khin Mon Villageにて機織りをする女性

人間知恵の輪　ほらほら、こっち来て

ミャンマー／AM オイスカ研修センター　11月6日(火)

オイスカでの農業体験。遥か遠い異国の地で日本の技術が息づく。

オイスカ研修センターでの二日目が始まった。初めて経験した蚊帳ベッドは涼しく、快適であった。私たちは5時に起床し、研修生たちが毎日行っている朝礼に参加した。日本の人員点呼やラジオ体操を取り入れたきびきびした動きには、早朝から圧倒された。その後、センターのスタッフから寺院を案内していただいた。地平線に広がる朝日と、朝日に照らされる伝統的な寺院の姿に、ミャンマーの雄大な自然と文化を感じることができた。

朝食後、作業内容ごとに5つの班に分かれ、農業体験を行った。私たちは、養鶏作業を担当させていただいたが、ひよこに目薬をさす作業だと聞き、私たちができるのか皆不安気だった。目薬をさす目的を聞くと、季節の変わり目に流行りやすい病気の予防には、年3回の目薬が欠かせないそうだ。生後17日のひよこを手に取るととても温かく、鶏冠も生えかけていた。最初は戸惑ったものの日本語が堪能なスタッフの指導のおかげで徐々に作業スピードも上がった。約1時間の作業を終え、300羽以上のひよこに目薬をさしたメンバーたちは、皆爽快感と達成感に包まれていた。

残る4つのグループでは、稲作や野菜作り、食品加工、養豚作業を体験した。稲作では、苗から移植された水田の稲は大きく育ち、収穫を待つ稲穂が頭を垂れている。オイスカの米種子は非常に人気が高く、販売日には行列が出来、近隣農家だけですぐに売り切れてしまうそうだ。野菜作りでは、農薬を使用せず、センターでの食事の残渣や籾殻等を使った「ぼかし肥料」を使い有機栽培による野菜作りを行っている。有機栽培にこだわるのは、今後、ミャンマーでも経済の成長に伴い、有機野菜の需要が増えると予想されるためだ。食品加工では、日本の高い衛生基準を満たした作業場で日本風のあんパンや食パンが作られている。現地住民に非常に好評で、オイスカの貴重な収入源になっているそうだ。養豚作業では、雄臭を防ぐため子豚の去勢作業を体験した。メンバーは、初めて体験する作業と子豚の悲鳴に興奮と驚きを隠せずにいた。このオイスカ研修センターは、今から22年前、多くの日本人ボランティアも参加し、荒野だった土地を手作業で開墾し、開設された。センターで作られた農産物、加工品の売り上げで運営され、独立採算にこだわっている。研修生に、販売のノウハウ、稼ぐことの大切さを教えるためだ。

オイスカ研修生に将来の夢を聞くと、「ここで学んだ技術を多くの人に伝えたい」と返ってきた。研修生が、学んだ技術をさらに多くのミャンマー人に広めることで、オイスカの事業の成果は大きく広がる。遥か遠い異国の地で、日本のNGOが行っている地道な活動とその成果を目の当たりにした。

今後、ミャンマー農業の発展には、生産技術に加え、高付加価値の販売方法、流通網の整備、情報発信など多くの問題が残されている。しかし、ここには高度な指導を受けているオイスカ研修生がいる。彼らはリーダーとなり、それらの問題を解決してくれる存在だと確信した。

次に、パコックの市場を視察した。多くの商店が密集して、商人や買い物客で大変な賑わいを見せていた。日用品から肉・野菜・魚までありとあらゆるものが揃っており、活気で溢れる市場の光景は、これからのミャンマーの発展を予感させるものだった。

（文責:竹井大善）

ぼかし肥料を作る団員

人参たっぷりのケーキ作り

稲作について説明を受ける団員

ひよこに目薬をさす団員

小豚の去勢作業の体験

有機野菜への水やり

商店と人で活気に満ちたパコックの市場

第１次研修 >> >> 第２次研修 >> >> 第３次研修 >> >> 第４次研修 >> >> 第５次研修 >> >> 第６次研修 >>
海外研修

ミャンマー／移動＆夕食交換会（ヤンゴン）　11月6日(火)

ミャンマーの発展に様々な領域から貢献する日本の方々との食事会で学び、刺激を受けた。

移動

朝早くから活動していて、移動のバスや飛行機の中では皆疲れが見えはじめた。寝たり、話をしたりそれぞれ自由に過ごす車内。ガイドのオンマーさんが、ミャンマーの政治・文化・人々の暮らしについて流暢な日本語で説明してくれる。また、ミャンマーの人々の生活の一部にもなっている曜日占いもしてもらった。曜日占いは生まれた曜日で基本性格を診断するもので、ミャンマーでは生まれ曜日にちなんだ名前をつけるのだそうだ。

夕食交歓会

ミャンマーでの最後の夕食会は、福岡県にゆかりを持ちミャンマーで活躍されている西垣充氏、堤雄史氏、野田勝也氏の3名をお迎えし、食事を共にした。

西垣充氏は、Japan SAT Consulting Co.,Ltd.の代表取締役で、ミャンマーへの企業進出コンサルティングや人材紹介・派遣、また視覚障がい者自立支援など多岐にわたる活動をされている。ヤンゴンで起業し既に20年以上の日系ビジネスマンの草分け的存在であるとともに、現在は福岡県が運営する「福岡アジアビジネスセンター」のアドバイザーを務められている。

堤雄史氏は、SAGA国際法律事務所の代表取締役兼弁護士でミャンマーのみならずタイやマレーシアでも活躍されている。日系企業が海外へ進出する際にぶつかる大きな壁である言語、文化、制度の違いを法や経験の側面からサポートされていて、日本と新興国の相互発展を目指されている。

野田勝也氏は、福岡市からヤンゴン市に派遣されている駐在市職員である。福岡市がヤンゴン市にJICA専門家として市職員を派遣したことから交流がはじまった。野田氏は姉妹提携をしている両都市の交流やヤンゴンのインフラ整備に貢献されている。

私たちはミャンマーで、オイスカ研修センターに滞在している時間が長かった。そのため、ビジネスのことだけではなくヤンゴンやミャンマーの生活や現状を教えていただく良い機会でもあった。日本ではなかなか聞けない海外ビジネスの話、ビジネスをしているからこそ見えてくる現地の国民性や暮らしについての話。様々な観点からのお話を聞いて、短い時間ではあったが、団員それぞれ刺激を受けた非常に貴重な時間になった。

帰国後、福岡県内で西垣氏のトークイベントが開催され、団員も数名参加した。研修で得たつながりを活かして、今後新たなビジネスがうまれるかもしれない。

（文責:河村梨南子）

野田氏、西垣氏、堤氏を交えた集合写真

挨拶をする団員の高橋さん

お礼の挨拶をする団員の田島さん

堤氏の話を聞く団員

バスの中で案内をされるガイドのオンマーさん

バスの中の様子

ミャンマー／福岡県戦没者慰霊碑、マレーシアへ移動　11月7日(水)

戦没者慰霊碑を前に感じたこと

敗戦から70余年が経過し、戦争を知る世代が減少しつつある現在、かつての大戦は歴史上の出来事としての存在感を増し続けている。そんなことを感じる中で訪れたのがミャンマーにある戦没者慰霊碑だった。ここでは先の大戦時、ミャンマーで散った14万人が今も眠っている。東南アジア全体で約80万人いるとされる戦没者の3割近くが祭られていることからこの地がどれだけの激戦地であったかは想像に難くない。その中でも、ミャンマーでは福岡県人の戦没者が特に多かったようである。

市場にそう遠くない場所に位置するこの場所は、その喧騒から切り取られたように非常に静かで、花や草木で彩られたどこか別の世界のように感じた。現地の方の話によると、ミャンマーの人々の多くは日本に対しいいイメージを持つ人が多いそうだ。戦争という一つの出来事を乗り越えて、互いが歩み寄りを続けた一つの大きな遺産である。

先に述べたようにミャンマーのみならず、東南アジアではマレー作戦以来、激戦が繰り広げられた。今回の戦没者慰霊碑への参拝を通じて、東南アジアの国々と北東アジアの島国という大きな視点から、少しずつ、国と国、国と地域、人と人といった小さな接点へとお互いの文化や歴史を理解しあえる関係を築き上げ、育んでいくことを、戦没者を前に祈念することができた。

参拝を終えて向かったのはミャンマーらしさを体現するかのような市場であった。日本ではまず見られないような地面に座って料理を作り提供する露店や、とれたての果物や野菜を提供する露店などが軒を連ね活気に満ちていた。朝という時間も相まって朝食をとる人々や現地ではおなじみの“にゅう麺らしきもの”で英気を養う者もいた。一見すると不衛生、慣れない環境と敬遠しがちな風景ではあるが彼らの日常を垣間見ることができる良い機会であった。

（文責:北村　空）

〈上段〉戦没者慰霊碑と管理をしてくれている方　〈下段〉市場の様子

第１次研修 >> >> 第２次研修 >> >> 第３次研修 >> >> 第４次研修 >> >> 第５次研修 >> >> 第６次研修 >>
海外研修

マレーシア／AM 華人系小学校訪問　11月8日(木)

現地の小学校を訪問し、マレーシアの教育と多民族国家の関係性および日本との教育の違いを理解する。

1. マレーシアの多民族国家について

マレーシアは典型的な多民族国家でマレー系、中華系、インド系などの民族、それと先住民族で構成されている。人口的にはイスラム教を信仰するマレー民族が大多数を占めているが、中華系移民やインド系移民などはそれぞれの民族が独自の言語、宗教、生活習慣、民族衣装、食生活などの文化、伝統を守りながら暮らしている。それぞれの民族は、融合することなく他の民族に関し基本的に不可侵のスタンスで互いの民族における宗教・生活様式を尊重し共生している。以上のことを踏まえ、華人系小学校訪問の報告とする。

2. 教育のスタイル

当小学校では、民族に合わせて英語、マレー語、中国語の3つ言語で授業が行われており、私たちはそれぞれの言語の授業を見学させて頂いた。日本では板写、テストの繰り返しで授業が進んでいき、受動的なスタイルであることが多く見られる。しかし、見学を行った授業ではいずれのものにおいても、板写主体のものはなく、生徒が積極的に発言し、能動的な学習が行われていた。また、グループ活動を含んだ授業も行われており、生徒に考えさせる、あるいは発言させることを主体として授業が展開するよう工夫されており、日本と学ぶスタイルが異なっている事が教育現場に立ち会うことで身をもって感じることができた。

教室正面には愛心組、天才組などの成績順にクラス分けをしており、小学生の頃から、競争社会で生活する訓練が実施されていた。これについては、”サトリ世代”と言われる日本の学生についても、この制度を実施し、人と競争することに抵抗をなくすべきであると思う。

また、休み時間・給食間には民族、言語分け隔てなく楽しそうにしている風景から、お互いにコミュニケーションが取れていることを見て取る事ができた。授業の言語が違えど、日々の生活の中で、他言語と触れ合う機会があり、小学生のうちに第二、第三外国語で会話できるようになることは将来のことを考えると非常にメリットのある事である。日本では、生活環境の中で他言語に触れる機会がほとんどなく、意識的に学ぼうとしない限り、日本語でしか会話することはない。日本にもこのような他言語と触れ合える場所が増えていくことで、国際社会に強い人材が増加していくと考える。

3. 総括

以上のことから、幼少時より、様々な民族と触れ合うことのできる教育環境やグループ活動における相手の意見を受け入れ、話し合う訓練は少なからず、マレーシアにおける他民族国家存続に影響しているものと考えられる。また、第二、第三外国語を小学生のうちに会話できるまで習得できる事は、将来、国際的に働く事のできる人材を育てるカリキュラムとして確立されていることが分かった。ICT教育についても、保護者からの支援だという話を聞く事ができ、教育に対する関心のあり方も日本とは大きく異なる事を感じることができた。このような教育に対する意識の差は、日本とマレーシアとの差を縮められる要因となることが考えられる。

（文責:山中優貴）

現地の小学生とハイ、チーズ1

青年団による出し物披露

グループワークを行っている授業風景

現地の小学生とハイ、チーズ2

マレーシア／AM ハラル産業開発公社 (Halal Industry Development Corporation)

11月8日(木)

マレーシア政府所有であるハラル産業開発公社を訪問し、マレーシアハラルについて学んだ。

1. ハラル産業開発公社

HDC とはHalal Industry Development Corporation（和訳：ハラル産業開発公社）のことで、マレーシア財務省所有の政府公社である。

HDC は、マレーシア政府により2006年に設立され、マレーシアのハラル規格を国際規格に準拠した厳しい規格として定着させ、政府が掲げる「マレーシアをハラルハブに」を合言葉に、ハラル産業の発展、ハラル認証制度の普及・定着、ハラル関連企業へのサポート、世界へのハラル発信に取り組まれている。

2. ハラル

HDCのMohamad Romzi Slaman氏より、ハラルに対しての知識が少ない私たち団員に、ハラルとハラル認証について、分かりやすく講義を行って頂いた。

まず、ハラルとはイスラム教で「許されたもの」を意味する。反対にノンハラルは豚やアルコールなどが挙げられる。ハラルとノンハラルの境界線は個人の判断に委ねられており、講義を聞いて感じたことは、ハラルとは、一言で簡単に説明できるものではなく、我々はハラルに対してもっと理解をする必要があるということだった。

次に、その商品がハラルであることを証明するマークがハラル認証（ハラルロゴ）だ。飲料水については、ハラル認証は必要なく、飲料水に何か違うものを混ぜると認証が必要になるとのこと、アサヒ飲料様のカルピス商品は、マレーシアハラル認証を取得されているので、世界中で販売することが可能。実際にRomzi氏も私たちの前で、ハラル認証があればイスラム教徒にとって安全・安心だよってアピールしながらカルピスを飲食されておられた。

ハラル認証には国際基準はないが、マレーシアハラルは世界で唯一政府機関が認証するハラルであり、HACCP、GMP　といった国際規格に準拠した厳しい規格とされている。また、その評価は非常に高いもので、マレーシアのみならずイスラム教徒がいる各国に対し、その効果を発揮されている。日本にも、認証機関があり、株式会社ハラルデベロップメントインターナルジャパン（略称：HDJ）はHDC（ハラル産業開発公社）の日本代表機関として設立されている。

イスラム教徒の方々にとって、食事をする際にハラル認証があったほうが安心して飲食できるのか？また、ノンハラルのレストランに入るのか？入らないか？でいえば、ハラル認証があれば安心して飲食するし、ノンハラルのレストランにも入るそうだ。基本的に全て個人の自由。ただし、Cross contaminationしているリスクも伴うので、あくまでも個人の判断で決めるそうだ。

3. 最後に

Romzi氏は、過去のオリンピックでイスラム教徒の選手が力を発揮することができなかった体験から、現在2020年東京オリンピックに出場する選手に対して、準備を進められていると言われておられた。

日本は、まだまだハラルについての認知度が低いと感じた。私たちがハラルに対して、なかなか理解しがたいところもあるだろうが、まずは理解しようとする姿勢が大切だと思う。ハラルには、今後の日本にとって多くの可能性があり、ハラルの方々にとって、より良い環境を整えていくことが、これから先、日本に求められる課題となっていくものと考えられる。

（文責:高岡伴成）

Romzi氏から講義を受けているときの様子

集合写真

記念品贈呈

ハラル産業開発公社

第１次研修 >> >> 第２次研修 >> >> 第３次研修 >> >> 第４次研修 >> >> 第５次研修 >> >> 第６次研修 >>
海外研修

マレーシア／PM オタフクソース・マレーシア

11月8日(木)

ハラルビジネスの実状と可能性

オタフクソース・マレーシアは、お好みソースで有名なオタフクソースがハラル対応のソース製造・販売を主な目的として2016年に設立したマレーシアの現地法人である。代表の尼田様に事務所や工場内を案内していただきながらお話を伺った。

オタフクソースでは2016年以前から日本で製造した製品を世界55か国に輸出していたが、ハラル地域での実績を伸ばすためマレーシアに工場を設立した。そのため現地の工場ではハラル対応の製品のみを製造する。当然ながら原材料はすべてハラルであり、工場内にハラル以外のものを持ち込むことも禁止されているそうだ。ハラル認証の取得にあたっては特別に工夫したことはなく、日本の食品メーカーとして最低限の品質管理ができていれば問題なかったとのこと。また、この工場は市場調査のために実験的に作られたパイロットプラントの側面があることから、小規模でコストを抑えて運営されている。尼田様は以前オタフクの中国進出時に大規模な工場を立ち上げて運営に苦労した経験から、海外に事業進出する時にはなるべく小さくシンプルな設備で、状況の変化等に素早く対応できる体制をつくることが大切だと仰っていた。

従業員の雇用の面では作業員の定着率が低いことが悩みだという。近隣に住む人が求人を見てやって来ることが多いが、早ければ1週間で辞めてしまう人もいるそうだ。外国人労働者の数も減少しつつあるため、今後事業規模を拡大していく場合には作業員の確保が課題となる可能性がある。さらに、マレーシアでは待遇やスキル向上を求めて転職を繰り返すジョブホッピングの思考が定着しており、まだ辞めた社員はいないものの今後のリスクと感じているとのこと。また、日本とは異なる多民族国家ならではの対応も必要である。工場に隣接する事務所の建物2階にはイスラム教徒のための礼拝所が設けられていた。現地の従業員の方が就業時間中に行うお祈りは1回約10分程度、日本人のトイレ休憩やたばこ休憩と変わらない感覚で特に業務に支障はないとのこと。ただし金曜日の午後のみイスラム教徒の男性がモスクに行くために１～2時間現場を離れることから、現場で働く社員はインド系とマレー系の方をバランスよく採用するよう工夫しているそうだ。

オタフクではマレーシア進出以降ハラルについての問い合わせが増え、学食などのイスラム教徒への対応が求められる施設へ向けて、日本へ逆輸出を行っている。これまでと違うチャネルでの販路開拓につながったことは予想していなかった副産物であり、ブランド価値の向上を図ることができたということだ。

今回の訪問前は、ハラル食の製造やハラル認証の申請は日本企業にとってハードルの高い分野だと思っていた。しかし、尼田様のお話を聞くと、マレーシアでの事業の立ち上げにあたり直面した問題の中でハラル対応は最も苦労した部分ではなかったようであった。日本ではハラルについての認知度が低い現状ではあるが、今後日本企業にもハラル圏向けの海外ビジネスの可能性は大いにあるのではないかと感じた。

（文責:村上侑希）

オタフクソース・マレーシア事務所を訪問

工場内を見学

夕食の場でも尼田様に貴重なお話を聞かせて頂いた

マレーシア／AM マレーシア政府観光局　11月9日(金)

マレーシア政府観光局で日本とマレーシアの関りを知り、今後の観光施策を考える

1. マレーシア政府観光局について

マレーシア政府観光局の前身団体は1972年に発足し、マレーシア政府より3つの役割を与えられた。観光業発展のためのインフラ整備、旅行代理店等へのライセンスの発行、そしてマーケティングである。1974年、マレーシア政府観光局発足後、世界各地に拠点を展開し、現在はマーケティングに重点を置き、様々な施策に取り組んでいる。現在、世界各地に38のマーケティングオフィスがあり、日本には1974年に東京、1994年には大阪に拠点を作っている。

2. 日本とマレーシアの関係について

2018年マレーシア政府の政権交代によりマハティール氏が首相に返り咲いた。マハティール氏は親日家で知られており、1980年代の前首相時代には、ルックイースト政策に力を入れており、多くの留学生を日本へ派遣している。日本からの観光客はマレーシアを訪れる観光客数の第5位となっている。マレーシアから日本への観光客は、以前に比べかなり増加しており、アジア圏では、タイに続き第2位となっている。この理由としては、2013年より訪日ビザが不要になったことや、マレーシアの方々の多くが幼い頃より日本のテレビ番組を見て育っており日本を身近に感じているためであるとのお話を伺った。

3. 観光施策について

マレーシアは貿易拠点でもあり統治国家が何度も変わっており、多くの移民により構成されている。現在ではマレー系、中華系、インド系その他ボルネオ島の少数民族等105の部族で構成され、宗教についてもイスラム教、仏教、ヒンドゥー教など様々である。そのような背景の中で、他民族・他宗教の観光客を理解し受け入れることに長けていると考えられる。外国人の入国に関して、MM2H（マレーシアマイセカンドホーム）ビザという最長10年滞在可能な長期ビザの発行も行っており、定年退職後のロングステイ先として人気となっている。また、マレーシア全域において、電子決済についても広く普及している。しかし、マレーシアにおける観光促進の弱点については、限られた航空アクセス、予算の制約、新製品やリフレッシュ製品であると考えられている。日本人観光客に対しては、文化、食、自然のプロモーションに力を入れているというお話をいただいた。都市部については、既に都市として発展している日本人に対してそういった場所を観光地として推す必要はないという考えからである。

4. 感想

今回マレーシア政府観光局の方々からお話をしていただき、多民族国家であるマレーシアの観光事業の変遷を知ることができた。マレーシアの国民性として、他宗教、他民族の方々を理解・尊重し、共生できていることが世界一グローバルな国家として成立している要因ではないかと考える。日本人の宗教について、仏教または神道が属する人がほとんどであるが、クリスマスなど、もとはキリスト教の祭事も取り入れ、浸透ししている文化もある。この事から、我々日本人も、他宗教や他民族の文化や価値観を理解し尊重できると確信している。今後、さらに多くの観光客・外国人の方々が日本を訪れてもらえるように、他宗教や他民族の文化や価値観を日本人が理解していく必要があると考える。

（文責:田中英哲）

政府観光局の皆さんと

真剣にお話を聞く団員

お礼の挨拶をする野田さん

第１次研修 >> >> 第２次研修 >> >> 第３次研修 >> >> 第４次研修 >> >> 第５次研修 >> >> 第６次研修 >>
海外研修

マレーシア／PM SEGI大学　11月9日(金)

体験授業を通して感じた日本とマレーシアの違い

クアラルンプール構内にキャンパスを構える「SEGI大学」を訪問した。当日はイスラム教徒の休日であり、普段の活気ある大学の様子を体感することはできなかったが、SEGI大学の留学生サポートセンターに所属する学生スタッフに温かく迎え入れて頂き、彼らと一緒に他者理解を促すための体験授業を受けることができた。

体験授業は、学生スタッフが混じった小さなグループをいくつも作った中で行われた。はじめに、英語で自己紹介を行い、次に会話の話題が書いてあるカードをグループのメンバーが順番に引き、テーマにそって自由に意見交換した。テーマは主に自国の文化・習慣に関するものであり、英語に不慣れな我々にとっては大変苦労するものであった。次に、一人ひとりが好きな英語の文字1字を選び、仲間と協力して5文字以上の英単語を作る作業を行った。一人も余ることなく単語を作り終えるには想像以上の時間がかかったが、無事作業を終えるころには学生スタッフとすっかりと打ち解雰囲気となっていた。

日本では、授業中のほとんどを自分の席で過ごす。そして、授業に関する発言の多くを教師が担い、生徒はそれを必死にメモする。その教育的文化を考えると、「SEGI大学」では普段の授業においても良い意味で自由な授業を展開しているということが今回の体験授業を通して想像できた。おそらく、教師は生徒に積極的な発言をするよう促すとともに、その意見を重視し、授業の進行においてもその発言をもとに行うといった形で生徒が主体的に関われるものなのであろう。

今回学生スタッフとして我々と一緒に体験授業に参加してくれた学生たちは、さまざまな国々の出身であった。マレーシアは東南アジアの中心に位置するアジアの玄関口であり、人口3,000万人のなかにも、マレー系・中国系・インド系、そして多数の先住民族が共存する多民族・多文化社会を形成している。その多民族・多文化社会の中で学ぶSEGI大学の生徒たちを繋ぎとめるものは何か。それは、「英語」という共通言語と、他者の意見を受け入れる教育的文化であると考える。この２つがお互いの文化・価値観の境をなじませ、他者理解という重要な土台を作り上げている。SEGI大学の授業は、まさにこの土台を構築するための理想形であるように思え、その一端に触れた我々には貴重な体験となった

（文責:永岡拓実）

グループワークでの意見交換

英単語を作るレクリエーション

交流した学生との記念撮影

マレーシア／PM Apple Vacation

11月9日(金)

アジアの観光について学び、福岡とアジアの架け橋となる為に

1. Apple Vacationの概要

Apple　Vacationとは、1996年に設立され約３00名のスタッフが所属する、マレーシア最大手の旅行会社である。“Together We Can Do It” & There is No “I”in TEAMをビジョンとして掲げ、チームで力を出し合って最高のサービスを目指している。マレーシアを拠点に、東京・ジャカルタ・インドネシア・シンガポールにオフィスを構えている。更にベトナムにも進出予定である成長著しい地元企業でもある。

2. Apple Vacationの取り組み

今回はまずApple　Vacationの取り組みについてお話を伺い、その後意見交換をさせていただいた。Apple Vacationでは、お客様のニーズを理解するため、自分で提供する観光地に行き、運転を行い、レストランに行き、宿泊するなど、徹底的に調査を行い、本当に自分たちが良いと思ったところをお客様に提案している。日本を希望されるお客様には、「フォーカスジャパングルメ」というマレーシア人が好む食をメインにしたパッケージを提供している。また、花を見るのが好きである為、季節に合わせて春は桜、夏はラベンダー等を見ることができるようにパッケージに織り込む工夫を行っている。また繁忙期では、チャーター機を自社で用意し、マレーシア空港と日本を独自で結ぶなども取り組んでいる（１週間に５便を9年間実施中）。その取り組みの結果、高い顧客満足度を達成することができている。

3. 感想

今回の訪問を通して、特に印象に残ったことが二つあった。

一つ目は、現地での福岡の認知度の低さについてである。日本に観光する際は、ほとんどの方が東京・大阪を目指し、福岡を目指すことがないことが現実であると知らされた。今後はより一層、東南アジア各地から日本への観光客増加が予想される為、更なる情報発信により、認知度を向上させることの必要性を痛感した。ただし、悲観ばかりでなく、福岡を紹介すると選んでくれるお客様もいらっしゃるとのことなので、取り組み次第では、大きな成長を期待できるとも感じた。

二つ目は、ニーズにあった情報提供の大切さについてである。Apple　Vacationは徹底したお客様目線サービスを実施することで、リピーター率を高く保ち続けている（今年度は70%がリピーターを達成）。我々も研修を通して、最終的に福岡に貢献する取り組みを模索していたが、今一度取り組みを通して「誰に対して何を提供するか」を明確にして取り組んでいくことの大切さを学んだ。

今後、マレーシアと福岡の直行便が開設されるなど、より一層アジアの観光客が増えることが予想される。今回得た知識を日本に持ち帰り、福岡の観光対策に結びつけていきたい。

（文責:貴島道拓）

Apple Vacationについてご説明いただいた陳様

講義の様子

講義の様子

積極的に質問する団員

第１次研修 >> >> 第２次研修 >> >> 第３次研修 >> >> 第４次研修 >> >> 第５次研修 >> >> 第６次研修 >>
海外研修

マレーシア／夜　夕食交流会

11月9日(金)

マレーシアでビジネスを展開している方々や夢を持った大学生との夕食会で様々な刺激を受けた

海外研修最後の夕食交流会、これまで視察先でお世話になった企業をはじめとしたマレーシアでビジネスを展開している多くの日本人の方々、さらにはマレーシアの方々、現地の大学生にお越しいただき賑やかな夕食交流会が行われた。

夕食交流会は最初こそ緊張した雰囲気が漂っていたが、乾杯の音頭が終わると国籍や年齢など関係なく、会場全体が和やかなムードでコミュニケーションを取り食事や交流を楽しんでいた。

団員の自己紹介タイムで会場はさらに一つに

食事や交流を楽しみ少し経った頃に私たち団員の自己紹介タイムが行われた。会場全体が私たちに視線を注ぎ、団員は少し緊張した雰囲気だった。団員はそれぞれがオリジナリティやユーモア溢れるスピーチを英語や現地で覚えたマレー語などを交えながら行った。福岡の魅力について紹介する団員や漢字の「人」という字についてのパフォーマンスを行う団員もおり、現地の大学生やマレーシアの方々に大変喜んでいただいた。

その後も様々な業界の方、大学生の方々と交流を楽しみ、ビジネスや学業、日本やマレーシアの文化についてなど真剣な話もしつつ、プライベートな話題や流行などもお互いに英語やジェスチャー、時には両方の言語が話せる方の力も借りながらコミュニケーションを取り、談笑した。仲良くなった方とは連絡先を交換したり、SNSをフォローし合うなどした。

私自身も自己紹介で行った熱男パフォーマンスの効果か、たくさんの同年代の大学生が話しかけてくれ、SNSで繋がろうという事になり、帰国した現在もお互いの生活を報告したりメッセージで連絡を取り合っている。私が載せた日本のごくありふれた景色を美しいと反応してくれたり、私自身も観光ガイドには掲載されていないマレーシアの日常の風景に日々感動している。大学で観光産業を学ぶ私にとって、現地の人の日常の切り取りはとても勉強にもなる。夕食会において日本についてのイメージ、観光地のイメージなどを聞けたことも非常に勉強になった。この夕食会は、団員それぞれが様々な視点からマレーシアや日本の姿について改めて学ぶことができた貴重な時間となった。

楽しい時間はあっという間に

たくさんの笑顔に包まれた夕食交流会はあっという間に終わりを迎えた。

個人旅行で訪れただけでは絶対にお会いできないような幅広い業種、国籍の方やグローバルにビジネスを展開している方などと貴重な時間を共にし、お話を伺ったり、意見を交換できたことはとても貴重な経験となり、団員一人ひとりの財産となった。いつかまた再会し、一緒にビジネスを行えるようにこの研修で学んだことを活かしたいと改めて思える時間となった。

（文責:佐々田拓実）

緊張感漂う英語での自己紹介タイム

マレー大学、SEGI大学の学生たちと熱男ポーズ

マレーシア／クアラルンプール市内・近郊視察 そして福岡へ

11月10日(土)
～11日(日)

マレーシアの活気に触れ、一人ひとりがたくさんのことを学び、感じ、成長して福岡へ

毎日が全力投球の充実した海外研修もあっという間に最終日を迎えた。海外研修の最終日は、マレーシアの歴史や文化を実感するための視察である。我々は早朝ホテルを出発し、マレーシアの文化遺産バトゥ洞窟へ向かった。洞窟内には、ヒンドゥー教の寺院があり、寺院までは極彩色の272段の階段が続いていた。これは洞窟内の寺院のみが文化遺産と思った寺院側が、政府の許可なく行ったことの結果であるが、その極彩色の階段の観光価値が高まり、そのままの状態となったものと聞いた。派手さやきらびやかさを好む国民性やマレーシアのおおらかさを感じることができ、日本人との色彩や文化に対する感覚の違いに驚いた。

次に向かったロイヤル・セランゴール工場は、マレーシアの特産品の一つであるピューター（錫）製品の工場であり、入口ではギネスブック公認の世界一大きいビアマグが出迎えてくれた。日本語が話せる説明員が同行し、展示品一つひとつの説明があった他、サービスでキンキンに冷えたドリンクがピューター製のコップで提供されるなど、見学を楽しむ工夫が随所に見られた。ショップエリアでは一つ1,000万円を超える製品があり、皆驚かされた。

工場を後にした我々は、ムルデカ広場（別名：独立記念広場）へ向かった。1957年にイギリスからの独立を宣言した歴史的な場所で、ヨーロッパ風の建物が立ち並ぶ。中でも「I♡KL」というモニュメントは有名な写真撮影スポットである。ほかにも多くの「SNS映え」といわれる写真をたくさん撮ることができるスポットがあり、観光客自身にPRをしてもらう仕掛けには感心させられた。

午後は、地上282mのKLタワー展望レストランAtomosphere360°でクアラルンプール市内を見渡しながら食事をとり、その後は海外旅行客の多いセントラルマーケットを訪問。多くの人で賑わうセントラルマーケットでは、マレーシア土産で定番のナマコ石鹸やお菓子、衣類など様々なものが販売されていた。「ニホンジンカワイイネ」と声をかけてくる従業員も多く、少しいい気分になった。

クアラルンプール市内での視察を終えた我々はプトラジャヤへ向かった。プトラジャヤはマレーシアの行政機関が集まる新首都として開発中の都市である。我々は中心部のプトラ広場へ向かったが、そこには首相官邸とピンクモスクの愛称で親しまれているプトラモスクがあり、綺麗に整備された計画都市ならではの景観があった。生憎、ピンクモスクは大事な礼拝と時間が重なってしまい、内部の見学はできなかったのだが今まで見たクアラルンプールで目にしたモスクとは違い、ピンク色が可愛らしく印象的だった。

海外研修最後の晩餐では、毎日が刺激的で一瞬で過ぎたミャンマーやマレーシアでの日々を皆で振り返り、懐かしんだ。

団員一人ひとりが全力で学び、楽しみ、成長した海外研修であったに違いない。

（文責:八尋万葉）

ロイヤル・セランゴール工場

I♡KL

Atomosphere360°

バトゥ洞窟

ムルデカ広場

プトラモスク

セントラルマーケット

第5次研修

於：福岡県立社会教育総合センター
2018年12月8日(土) ～ 9日(日)

現在社会のキーワードを学ぶとともに海外研修を振り返り、福岡でのアウトプットを議論した。

海外研修を終えて約一か月、第５次研修のために団員同士久しぶりの再会を果たした。

今年度三回目となった篠栗での研修の一日目、三人の講師の方にお越しいただいた。

一人目の青年の会OGでもある、たいら由以子様には今世界中で議論の的になっている「循環」をテーマに団員が主体的に考えながらの講義を行っていただいた。現在の社会は人間の生活範囲の拡大や山林の生態系の変化により、数十年前に比べて循環が難しいものになっている。たいら様は現在、有機肥料を軸に循環型社会を目指す活動をされている。SDGｓといったキーワードが注目される現在、とても興味深い講義であった。

二人目の海外駐在を経て現在日本・ベトナム間で留学生をつなぐ事業をされている徳丸順一様にはご自身が責任者の工場が燃えるといった壮絶な経験などを用い、団員同士で議論しながらの活発な講義を行っていただいた。この時期にちょうど成立した改正出入国管理法案と自身のお仕事を関連させた説明も行われた。徳丸さんがおっしゃった「真に大事なのは理念」という言葉は、未知の海外に接するときなどに特に大事になってくるのではないかと思う。

三人目の竜口英幸様には米中の貿易戦争などの国際情勢のほかにも人権というテーマの下、日本と世界各国の取り組みの比較が行われた。例を挙げると制度により女性が閣僚の過半数を占めるなど取り組みが進んでいるフランスと違い、対策の少ない日本は女性の社会進出が遅れている。無策では何も変わらないのだと感じた。

また今回はたくさんの青年の会ＯＢ・ＯＧの方々にお越しいただいた。青年の会は地域で貢献活動を行いながら会員同士が研修以降も地域ごとにつながる組織である。人とのネットワークつまりは人脈が新しい価値を生むことをこのプログラムを通して何度も学んだので、ここで得るつながりも今後存分に生かしていきたい。

講義を終えて以降は観光・食チームと人材育成・教育チームに分かれて海外研修を生かした6次研修の県内フィールドワークに向けて準備を進めた。今回のプログラム全体では海外研修ばかりが注目されがちだがその目的はグローバルな思考を生かして福岡県内への貢献活動を行うことである。そのため６次研修は大変重要であり、各チームより良いフィールドワークにするために懸命に議論した。2次研修とのつながりも意識することで福岡県グローバル青年の翼のプログラム全体が大きな意味を生む。次の研修また報告会に向けて今後も準備は続いていくので、チーム内でしっかり意見を共有しあい、プログラムを少しでも良いものにしていきたいと決意を新たにした。

（文責:二嶋晃平）

講義名	講師
「小さな循環でいい暮らしをしよう」	たいら由以子 NPO法人循環生活研究所　理事長 （第2回福岡県青年の翼OG）
「国際的な視野を持ち、 地域で活躍する人材とは」	徳丸　順一 グローバルイノベーション事業協同組合 専務理事
「国際社会といかに共生するか ～日本の若者への期待～」	竜口　英幸 ジャーナリスト・米中外交史研究家 西日本新聞TNC文化サークル講師

循環をテーマに講義するたいら様

グローバル事業について説明する徳丸様

団員の意見に耳を傾ける竜口様

県内フィールドワークに向けた準備を進める団員達

副知事表敬　於：福岡県庁　2018年12月21日(金)

県庁表敬訪問

県庁訪問に参加する団員17人が集合した。第5次研修以来の再会だった。

集合場所から副知事室に通され、椅子に座り諸注意を聞き副知事が来られるのを待った。登場した江口副知事は非常に穏やかに対応してくださった。まず、団員全員からそれぞれの自己紹介と海外研修を通して印象に残ったことを発表し、団員代表挨拶として山中さんがミャンマーのオイスカ研修センターでのパン作り体験についてスピーチした。パン作り体験で指導をしてくれた現地の研修生は、将来ミャンマーでパン屋を開きたいと語っていたそうだ。「ミャンマーしか知らないから限られた選択の中で将来の仕事を選択しているが、もし日本や他の国を見てしまったら他の選択が生まれていたかもしれない。」そのように語っていた。その話を聞いてたしかにそうだと思う部分があった。知らない国を訪れることはその人の人生を変えてしまう可能性を秘めている。それは私たちだって同様であり、今回マレーシアの大学を訪問したことをきっかけにマレーシアの大学に進学しようと決断した団員もいた。次に、歓談の時間ということで江口副知事から現地の街の様子や女性の社会進出の事について尋ねられた。江口副知事はベトナムを訪問された経験があるそうで、バスの中から外を見ると車やバイクが激しくクラクションを鳴らしながら走っていたり、横断歩道が無いため歩行者は道を渡るとき運転側からわかるように手をつないでいたりしていたという体験談を聞かせて頂いた。ベトナムもミャンマーも日本とは違いバイクの所有率がとても高く、自動車は日本で使われた中古車を使用していることが多い。そういった点では、ミャンマーとベトナムの横断事情や車事情が変わらないということも知ることができた。女性の社会進出についてはミャンマーの女性について触れた。私たちが研修を通じて感じたのは、ミャンマーでは若者の活気があり、特に女性の活躍が目覚ましく管理職や経営者も女性が多いということである。一方、日本では社会制度はミャンマーと比べて整ってはいるものの、女性は結婚・出産を期に仕事を辞めて専業主婦になる場合も未だに多いため、実際の女性の管理職の数値はミャンマーより低く、女性の社会進出は日本の大きな課題の一つであると再認識した。最後に江口副知事を団員が囲い記念撮影を行い、訪問は終了した。

県庁表敬訪問を通して改めて福岡県代表として海外研修に参加できたことを誇りに思うことができた。福岡県のサポートあってこそ今回の研修は実現したので、今後も福岡県をはじめ、日本に貢献していきたいと思う。

（文責:中村晴香）

説明を聞く団員

団員の自己紹介

副知事との集合写真

第6次研修（フィールドワーク）　於：福岡工業大学附属城東高等学校　2019年1月26日(土)　**人材育成・教育チーム**

高校生とトークフォークダンス

我々は第6次研修でトークフォークダンス（以下TFD）という手法を取り、福岡工業大学附属城東高校の学生たちと交流した。我々がこの手法を取り入れた事には理由があり、これまでの研修で、本当の意味でのグローバル人材像について深く考えた結果、第二言語云々の前に、日本人は国際社会において自分の意見をきちんと伝える事ができていないという結論に至ったためだ。実際にマレーシアの大学でも、日本人はシャイで自分の意見を言わず、何を考えているかわからないという意見が現地学生から聞こえてきた。

日本のこれまでの教育は、個人よりも社会に重点を置いた集団教育による社会の道徳規範を身に着ける事が重要視されてきた。その結果、世界トップクラスの教育水準へ成長してきた。しかし一方で空気を読む、同調、足並みを揃える等といった教育がされてきた事により、自己表現力が他国に比べ劣っているように思える。

フィールドワークの際に、大牟田の明光学園でアクティブラーニング型授業（AL）を体験し、主体的に物事を考え、自分の意見をしっかり伝え、相手の意見をしっかり聞く、誰の意見も否定しないという教育を学ばせて頂いたが、正に前述した課題を解決していくためには、これまでの日本の教育の中にALのようなアクセントを入れていく事が、必要であると気づかされた。

そこで我々は、これからのグローバル社会を背負う高校生が、多国籍、多宗教国家のマレーシアの学生のように、相手の意見を聞き、互いを尊重した上で共存するというグローバル社会の前提を学ぶ機会になればとTFDを用い交流する事にした。

TFDは所謂フォークダンスと同じで二重円になって向かい合い、ダンスの代わりに、あるテーマに関し1分間ずつ意見を述べるという手法である。向かい合って司会者が提示するテーマについて自分の意見を話し、聞く側はその間しっかり聞く。テーマは様々で、「好きなテレビはなんですか」「年末年始どのようにすごしましたか」等の軽いものから「今謝りたい人、またはお礼を言いたい人はいますか」「将来の夢や目標はありますか」等の少し考える必要のあるものまで数十にわたって行った。お互いに話し手と聞き手を体験したら、外側の円の人が時計回りに席を移動してペアを交代した。

参加者全員、終始前のめりで話しており、笑い声が聞こえてくることもあった。終了後のアンケートで、「大人が意見を聞いてくれた」、「たくさんの人とコミュニケーションを取ることは大切だと思った」「大人と将来の夢の話をしておもしろかった」「新しい自分を見つけることができた」等、普段なかなか大人と真正面から向き合うことのない高校生たちに参加する前と後で心や価値観といった面で変化を感じてもらう事もできた。

主催した我々にも変化があり、高校生を相手取るとどうしても大人である自分の意見が正しいかのように錯覚してしまうが、聞き手の時は聞く事だけに専念するので、普段よりも子どもの意見を素直に聞くことができ、新しい発見や固定観念の誤りに気づかされ、聞く事の大切さを学ぶこともできた。

今後グローバル社会がますます進展していくが、そのような社会で活躍するために、他者理解、異文化理解、そして自分の意見を伝えることの大切さに気づかされた研修となった。

（文責:江頭一記）

高校生とトークフォークダンス

参加してくれた高校生たちと集合写真

これまでの活動紹介

第6次研修（フィールドワーク） 於：福岡県内各地（撮影地として）2019年1月14日(月)～27日(日)（撮影・投稿・分析機関として） **観光・食チーム**

福岡の知名度の低さを知り、マレーシア人に関心を持ってもらえるコンテンツを調査・分析

我々は、海外研修を終えるまで、「東南アジアから福岡に来る観光客が安心して楽しめる福岡」を目的として、受入環境整備に関連する活動を第6次研修に行う予定だった。だが、海外研修では東南アジアでの日本の認知度は高い一方、福岡の認知度が低いことを実感することとなった。

しかし、福岡とマレーシアのLCC直行便が３月に就航予定であり、若年層を中心に観光客に興味を持ってもらう機会も今後増えていくことから、第6次研修では国内対策よりも福岡の認知度を上げるための活動を行うことにした。具体的には、第４次研修で交流したマレーシアの大学生に協力を得て、彼らのインスタグラムアカウントを活用し、東南アジアでの若年層の福岡の人気スポットやニーズの調査・分析を行い、現地若者の「生の声」を県内の観光事業者に伝えることとした。

調査の方法

1. 福岡県内で撮影した写真を５種類のカテゴリ（食、夜景、歴史、花、景色）に分ける
2. ５人の現地大学生一人ひとりに１カテゴリを割り振り、５件ずつ投稿してもらう
3. 一週間後各投稿の「イイね」数を集計する

分析結果（表1参照）

食……和食が人気
夜景…派手できらびやかなものに注目が集まる
歴史…鳥居や城などインパクトのあるものが高評価
花……はっきりした色の花が人気
景色…日本を感じられるものが効果的

ランキング ＼ カテゴリー	食	夜景	歴史	花	景色
1	寿司	花火	浮羽稲荷	ひまわり	風鈴
2	うどん	キャナルシティ博多	小倉城	桜	滝
3	ラーメン	神社	博多祇園山笠	紅葉	福岡タワー
4	定食	久留米シティプラザ	宮地嶽神社	ネモフィラ	レベルファイブスタジアム
5	カフェ	小倉	筥崎宮	藤	サンセット

その他インスタグラムから得た現地のニーズ

- ●日本特有の文化（着物、茶道、花火等）がもっと知りたい
- ●食べ歩きやフルーツ狩り等、体験型観光の情報が欲しい
- ●食べ物に興味はあるが、食べられる物に制限があるため、原材料表記を英語で書いてほしい
- ●福岡の人気なスイーツや食べ物をマレーシアで売ってもらえると知る機会が増える
- ●きれいな歴史的建築物を見るだけではなく、過去の歴史的背景を知りたい
- ●Free Wi-Fiのスポットがもっとあったら望ましい

感想

今回この調査を行ったことで、東南アジアの若者の実際の感想や意見、そして好みを知ることができた。さらに、福岡に住んでいる私たち自身で福岡の場所や食べ物を現地の学生のインスタグラムを活用し、多くのマレーシア人に福岡の魅力を発信できる貴重な機会をいただくことができた。そして、改めて福岡の魅力を再確認することができた。何より、最も良かったことは多くのマレーシア人に日本の政令指令都市の1つである福岡を知ってもらえたことだ。この調査結果を第２次研修でお世話になった観光連盟の豊島様に協力を頂き、ホームページに掲載を提案することで、福岡の発展のひと押しとなることを望む。

（文責：河野亜美）

現地の声を分析する団員

REPORT 団員レポート

1班	江頭　一記	柏原　智香	河村　健利	北村　空
	城戸　夏葵	佐々田拓実	竹井　大善	田島　里歩
2班	緒方　康起	河野　亜美	倉吉　孝道	高岡　伴成
	永岡　拓実	平川　綾夏	八尋　万葉	山中　優貴
3班	河村梨南子	貴島　道拓	高橋　奈歩	田中　英哲
	中村　晴香	野田　健次	二嶋　晃平	村上　侑希

変貌するASEANの熱を感じて

江頭　一記
田中藍株式会社　第一営業本部　久留米営業部
Global Wings 1班

私の勤める田中藍（株）では、化学工業薬品をメインに、国内だけでなく国外の企業に対しても積極的なグローバルビジネスを推進しており、海外へのビジネスに寛容な雰囲気を持っています。

かく言う私も、数年前にマレーシアへのビジネスを経験致しましたが、そのビジネスは結果として成就致しませんでした。失敗の原因としては、今思えば、価格だけでなく、文化や商慣習の認識不足もあったのではないかと思っています。

そういった経験から、私が海外ビジネスに消極的になり、それ以降国内ビジネスにばかり注力し仕事をしていました。正直申しまして、海外ビジネスへの憧れはありましたが、失敗した経験や日々の業務に追われ、考えないようにしていたように思います。

しかし、今回会社からこの研修への参加の打診を受け、この機会を逃すと一生国内で治まる可能性があるとの危機感もあり、チャンスをつかむ気持ちで参加させて頂きました。

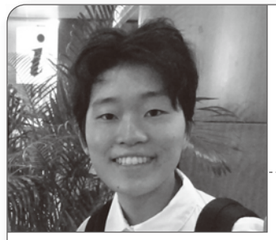
今回の海外研修での一番の衝撃はクアラルンプールの発展にありました。50m置きに高層ビルが建設中で、多種多様な人種が住み、席につけば新しい仕事の話が始まるといった状況で、日々の仕事との規模の違いに愕然と致しました。日本の先輩方はバブル期を想像して頂ければ分かり易いと思います。それほどの熱がクアラルンプールにありました。改めて海外進出の重要性と将来性を感じました。

「今年の目標は海外進出です！」と言いながら一向に進まない。国内向けの業務に日々追われ、数年経っても一向に具体的なプランが提示されない。そしていつの間にかなかった事になっている。そんなケースは取引先でもよく聞く話です。クアラルンプールの熱を肌で感じ、日本の企業はこのまま国内だけに目を向けていても、将来は事業だけでなく会社もなくなってしまう事態になってしまうのではないかと考えさせられました。

日本の企業と海外の企業の圧倒的な違いの一つは狙う市場の大きさだと思います。日本の企業の大半は日本の市場のみを対象としているのに対し、海外の企業は最初から世界市場を視野に入れている。同じ努力をするならリターンが大きいところを狙う方がいい。

今回の研修で、海外のビジネスの熱を肌で感じられた事が一番の収穫でした。帰国し早速大きい海外の仕事を、というわけにはいかないと思いますが、小さい事から速く、取り組んでいきたいと思います。

今度一緒にお仕事しましょう。



地球上の点はどこでも自分の周り

柏原　智香
九州大学　理学部　物理学科
Global Wings 1班

私は小さい頃から海外という言葉を聞くたび、気になってそわそわした。そこにあったのは、何となく日本の消費社会の中に漂い続けている欧米諸国の文化への憧憬だったかもしれない。海外に住むことは、子どもの私が抱く漠然とした夢の一つだった。

しかし、その土地の人がその社会を回しているのであって、無条件によそ者である自分の居場所があるわけではない。自分が何のために何をしに海外に行きたいのかという問いに、私は答えられなかった。だから、大学では様々な海外短期プログラムが提供されていたが、楽しむだけではなく本当に学ぶことができる海外研修に参加したいと考えた。この研修では土地固有の文化を肌身で感じられるのではないかと思い、参加させていただいた。

3回にわたる事前研修では、教育班に所属し、国際化社会に適応した教育についてディスカッションし、先進的な教育現場を視察した。研修を受けていくうちに、グローバル化を受け否応なく多様な文化をもつ人たちが生活する社会で、多くの人に対応できるだけの問題解決能力を身につけ、共生する社会を実現してほしいと思うようになった。その中で、解決策として注目されているのがアクティブラーニングであり、その先に浮かぶのは、人種や出身国の違いだけではなく、育った環境、それまでの経験や信仰の差異、障害の有無に由来するわだかまりを対話と協力によって越える共生社会だった。

オイスカでは有機栽培を広める志に触れ、自国への理解と責任を背負っているオイスカ研修センターの人たちの姿勢を痛感した。マレーシアの人たちの多言語の習得能力と自他の文化への理解によって実現された多文化共生社会の実現に目を見開いた。同時に宗教施設の利用や民族的なニーズを満たした学校教育と言ったシステムが未熟なゆえ、個人の自由の保証に至っていない日本社会に気づかされた。

この研修では、いい意味で憧れを壊されたと思う。海外という「場所」に行くことに、価値と真の異文化交流があるわけではない。オイスカの人たちのように、日本の技術が地元に貢献するからこそ繋がる価値がある。あるいは異なる文化を持つ人々への対応で自分の街が変容したとき、文化的摩擦への解決が迫られ、本当の意味での共生が問われる。人の役に立つとは、地球のどこかの地元の人の役に立つということ。他者のことを広く知り、各地の少数派の人たちの味方になれるような人になりたいと思った。

経験する事で知りたくなる世界

河村　健利
杉村包装資材株式会社　営業部
Global Wings 1班

私は社会人4年目としてできる仕事も増えてきて、もう一つ上の段階に行きたいと思っていた時に、会社から今回の研修に参加する機会を与えて頂き参加する事となった。正直な所、今まで特別海外に興味があったわけでも無く海外について勉強などをしてきた訳でも無かった。しかし、色々と慣れてきたこの時期に今までにない経験をしたいとの思いもあり不安と期待が入り混じった気持ちで研修に入った。

国内研修では普段聞く事のできない貴重なお話を聞いていく中で、実際に現地ではどのような状況なのだろうかと早く見てみたい気持ちが強くなっていた。

海外研修として実際にミャンマーとマレーシアに行き現地の生活や学校、企業等色々と見る事ができたが、私がイメージしていた物とは全く違っていた。ミャンマーといえば発展途上国で全体的に暗いイメージだったが、実際に自分の目で見たミャンマーの生活等はまだまだ貧しい面は見受けられたが、オイスカ研修センターで出会った方々は皆明るく明確な目的を持ち学んでいた。また、印象的だったのが日本について知りたいと思い積極的に質問をしてくれる姿だ。日本の国旗についての意味や原爆を投下された事でも有名な長崎の現状等、私たちも答えるのに少し考えてしまう質問を投げかけてくれた。意見交換を行う中で、私が海外に向ける目とミャンマーの方が海外に目を向ける意識の違いに非常に刺激を受け、私ももっと知るべきだと感じさせてくれた。

マレーシアにおける学校訪問では日本とは全く違う教育をしている点に、衝撃を受けた。英語、中国語、マレー語と多民族国家ならではの様々な言語の勉強をしていたが、どの授業も自分で考える力という点に非常に重点をおいており、私たちがしてきた板書をして教科書を覚えるというような内容はほとんどなかった。幼い頃よりこうした勉強をする事で、自分で考えるという力が身につくのだろうと感じさせてくれる授業だった。

今回、この研修を通して私が1番感じたことは「実際に見て触れることで、より知りたいと思える」ということだ。話を聞くだけ本を読むだけでは、中々深く知りたいとまでは思えなかったと思うが、現地で話をしてその考えに触れ、様子を見て知る事で、より知りたいと感じ他の人にも伝えたいと思えた。私は営業職なので物を売るだけでなく情報を提供するという点も非常に重要視しているため、今回の経験を仕事の中でも多くの人に話していけたらと思っている。今後のミャンマー、マレーシアの発展に注目しながら私たちも日本のそして福岡の発展に貢献できるようにしていきたいと思える研修だった。

最後に私の人生において非常に大きな影響を与えてくれたこの研修に参加させて頂いた関係者の皆様と会社、そして一緒に研修を受けた仲間達に心よりお礼申し上げる。

国境を越えることの意味

北村　空
北九州市立大学　外国語学部国際関係学科
Global Wings 1班

「国境を越える」とは一体どういうことなのか。この研修は筆者にとり、それを十分に教えてくれるものであった。もとより大学の中では海外志向も薄く、ひと月以上長く海外に滞在した経験がないこともあり、日々の学習には多少限界を感じつつあった。そんな時、大学の先輩の紹介で参加したのがグローバル青年の翼事業であった。大学で何を学んでいたのか、また今後それをどう生かしたいのか、そういった疑問を抱える中でのスタートであったことが、まるで昨日のことのように思い起こされる。

大学では北東アジアや東南アジアの国際関係をいわば網羅的に学習していたが、思い起こせばそのころから東南アジアの未来や日本の限界を肌で感じて、心のどこかで「行ってみなければ」と思っていたのかもしれない。日本とかかわりの深い国というとアメリカや韓国、中国など政治的にも外交的にも課題が山積する国家があげられる。さらに、東南アジアの国々を想起しても、そこには発展途上国、遅れている国といった印象があった。無意識のうちに視野狭窄に陥っていたことは言うまでもない。

国境は机上の学習では越えられない。そのことに意識を置いていたつもりだったにもかかわらず、飛んで初めてミャンマーもマレーシアも私が思っている以上に大きく、美しい国であったことに気が付いた。

事前の研修で学習した事は、もちろん大学で学んでいたこともあったが、実際に現地で生活を営んでいた方や日々課題と向き合う方と現地で接する中でミャンマーとマレーシアのイメージはより具体的になり、ますます何を学べば、何をすればいいのかという問いに直面するようになった。だが、研修を経た今だからこそ、一つの答えを導き出せたのではと感じる。私はきっと、ミャンマーとマレーシアでの生活に、いわば日本で感じにくくなった好奇心や未来を感じたかったのだ。そして再び、日本でもそれを感じられるようになりたいと強く願っていたのである。それは個人の力では途方もなく長く、険しい道のりであるからこそミャンマー、マレーシアといった東南アジアの中でも成長著しい国の人々とともに今後のアジアを率いて立つような人材になりたい、そのために何か行動を起こしたかったのだ、と一つ答えを導き出せた。

宇宙から地球を見たとき、そこに国境線はない。人々が勝手に生み出し壁として設けてしまったのである。「国境を越える」とは、そんな無意識のうちに書かれた線を自らで打ち消す行動を起こすことである。今回の研修は事前研修・海外研修を通じてそれを教えてくれた。そして、ともに活動をしてくれた皆さん、本当にありがとう。

「生き方」は無限にある

城戸　夏葵
西南学院大学　国際文化学部　国際文化学科

Global Wings 1 班

研修に参加しようと思った理由は「異文化を知りたい」や「生きている英語を実感したい」だったが、研修に参加していくうちに「生き方」を学んでいるような気持ちになった。もちろん異文化や英語も大切だが、それ以上に今の私にとって「生き方」は重要なキーワードである。

国内研修では、ミャンマーとマレーシアの基礎知識と現在国内・国外でグローバルに活躍されている方々の話を聞いた。どの講師の方も、いきいきと講義をしてくださり、自分たちの仕事に誇りを持っているようだった。日本の小さな町の小さな研修室で、とても大きなことを話している。なんだか不思議な空間だった。研修に参加するまで私にとって、ニュースなどで見る海外の出来事は現実味のない話のように聞こえた。しかし、海外で活躍されている方々からお話を聞いていくうちに、現実に海外で起きていることとして素直に認めることができるようになった。

海外研修では、ミャンマーとマレーシアを訪れた。ミャンマーのオイスカ研修所での意見交流会のとき研修生に「趣味は何？」と聞いてみた。すると研修生は「農業」と答えた。また、現地の学校を訪れた際、挨拶をしてくれた12歳の少年が自分の農業に対する思いを、言葉を詰まらせながら語ってくれた。ここで私は、人々の「生き方」の違いに視点が向いた。このミャンマーという国では自分の生まれた環境で将来が決まることが多くある。しかし、農業に取り組む研修生たちの姿はいきいきとしていた。一人ひとりが前を向き、自分の意思を持ち、自分たちの未来のために行動していた。今の私はどうだろうか、彼らのように何か努力をしているだろうか。研修中、そう自分に問いかけてみた。そして、今までを振り返ってみると、今までしてきたこと（勉強、ボランティアなど）のどれもが中途半端で、自分の身になるまで何かを一生懸命に努力したことは私にはあっただろうか、と改めて自分を見つめ直した。

国内研修を初めとする全ての研修で、私は沢山の仲間に出会い、将来の可能性は無限にあるということを知った。しかし、私はまだまだ未熟で、将来の夢も決まっていない。そんな私が、無限の選択肢の中から「生き方」また「働き方」を選択するには、やはり努力をしなければならない。そのために私は、今までの中途半端な自分を捨て、現実から目を背けず、しっかりと前を向いて努力をし、これからの日々を過ごそうと思う。

言葉だけじゃないコミュニケーション

佐々田　拓実
九州産業大学　商学部　観光産業学科

Global Wings 1 班

私は普段大学で九州を中心とした観光産業について学んでいます。その中で福岡のインバウンド事情について興味を持ち、中国や韓国からの観光客を中心とした受け入れ態勢が整備される中で、将来的に増加するであろう東南アジアやアフリカなど、より様々な地域の人たちが観光において何を求め、日本を素敵だと思ってもらえるのかを考えるようになりました。しかし、自分が現地の様子や空気も感じていないのに少ないネットの情報や他人が書いた著書では相手の気持ちを理解できるわけがない、自分らしい答えは見つからないと思っていた時に、大学の先生に「福岡県グローバル青年の翼」を推薦していただきました。

1次研修から3次研修までは福岡県のインバウンド事情からグローバルにビジネスを展開されている方のお話、東南アジアの暮らし、文化、経済に至るまで様々な分野、視点での普段大学では学べないような貴重な講義を聞かせていただきました。注目されているMICE事業での交流人口の増加や消費額増加への取り組みなど新たな観光産業への取り組みも詳しく知ることができ、より知識や視野が広まりました。

海外研修ではミャンマーとマレーシアのクアラルンプールの街並みや暮らしぶりの違いにとても驚きました。

ミャンマーで訪れたのは東北部エサジョを中心とした地域、村と村を結ぶ道路は一本しかなく、作ったものを売り、他の人が作ったものを買い、村の中で経済が完結している様子やマーケットに平然と並ぶ生魚や生肉が印象的でした。しかし４G回線はどんなに奥地に行っても繋がるし、スマートフォンも普及しており昔ながらの暮らしと近代的な文明が共存している不思議な光景を目にしました。

一方のマレーシア、クアラルンプールは見渡す限りの高層ビル群で、高速道路が縦横無尽に繋がっており、電車も無人運転で日本よりも先進的な技術が取り入れられていて東南アジア内でも経済的、文化的違いがあることを肌で感じました。

一見対照的な二つの国ですが、東南アジアの人々はまっすぐな目をしていて、友好的で意欲的という点では共通していました。ミャンマーの奥地でもマレーシアの訪問先でも、英語やジェスチャー、体全体を使って必死に自分たちの意見や疑問を私たちに伝えようとしてくれたのがとても印象的でした。私は英語が苦手でコミュニケーションをうまくとれるのか、思いが伝わるのかと不安でしたが、そんな不安を一切取っ払い、コミュニケーションは言葉だけじゃなく、決して上手くなくても想いは伝わると学びました。

今回のプログラムに参加し、個人旅行では決して訪れることのできない企業や政府機関への訪問、意見交換の場は夢である東南アジアと日本を観光で繋ぐ人材になることへの大きな第一歩になったのではないかと思います。

この研修で学んだことを、夢を実現するためのエネルギーとして、グローカルな視点で物事を捉えられる社会人に成長したいです。

アジアの現状とこれからやるべきこと

竹井　大善
柳川市役所　産業経済部　農政課　振興係

Global Wings 1 班

私は以前ある中小企業の経営者から聞いた「柳川では求人を出しても若い人が集まらない。これからは外国人労働者を雇用する必要がある。行政が先頭にたって人材の受入れをしてくれないか。」という話がとても印象に残ってた。人口の減少や少子高齢化を数字としては知っていたものの、柳川市がそこまで人材難になっていたことに恥ずかしながら気づいていなかった。行政として具体的に何ができるかも分からずにいたとき、上司からの薦めで「福岡県グローバル青年の翼」事業を知り、市職員としてどのように関われるかを知るきっかけにしたいと思い、応募させていただいた。

事前研修では、講師の方々からミャンマー、マレーシアの文化や習慣・経済に関する講義を聞くにつれ、知識が深まり、早く現地の活気を肌で感じたいと思うようになった。

また人材育成・教育班として県内のグローバル人材の教育を学ぶべく訪問した明光学園中・高等学校では、日本人が苦手な自分の考えを主張することを克服し、グローバル社会で通用する人材を育てる目的でアクティブラーニングという手法が授業に取り入れられ、日本のグローバル教育を知ることができた。事前研修で日本の教育現場や県内企業の動向等を学習できたことで、海外研修ではより深い知識を得ることができた。

ミャンマーでは、優秀な人材の教育と派遣について学ぶことができた。電力不足やインフラの整備など多くの問題を抱えながらも発展を続け、首都ヤンゴンは活気にあふれていた。国の主導で教育レベルも大幅に引き上げられ、世界中に多くの人材を輩出している。現地で人材派遣等を長年行われている西垣充氏の「日本はすでに金持ちの国ではない。良い人材は他の国と取り合いである」という言葉は特に印象的だった。海外の良い人材を獲得するためには、海外の現状を知り、外国人労働者から選んでもらうという意識を持つことが必要であること知った。

マレーシアでは、多民族の共生と教育レベルの高さを学ぶことができた。イスラム系や中華系、インド系など多民族が互い文化を認め合い、共生することで独自の発展を遂げていた。おたふくソースマレーシアでは、お祈りができる個室の設置や礼拝の時間に配慮したシフトを組むなどムスリムの従業員が働きやすい環境が整えられていた。外国人労働者を受け入れる、また企業が海外へ進出するためには相手の文化を理解し、認めることが必要だと感じた。その後訪れた中華系小学校では、すでにアクティブラーニングが取り入れられており、生徒が積極的に発言する活気ある授業が行われていた。日本では先進的な取り組みも、マレーシアでは当たり前のように行われていることに衝撃を受け、日本のグローバル教育の必要性を痛感した。

私は、柳川市に多くの良い海外人材が集まる先進地にするため、この研修を通して得た貴重な経験を周囲の人々に発信し、より多くの人に海外の現状を知ることの大切さに気づいてもらえるきっかけづくりを行いたいと思う。

最後に、この研修に一緒に参加した多くの仲間から非常に良い刺激を受け、ともに過ごすことができたことは他では得がたい貴重な財産となった。福岡県青少年育成課の皆様、また私を派遣してくれた柳川市に感謝する。

人との出会い、笑顔の交流

田島　里歩
社会福祉法人あさくら会　ひろにわ保育所　保育士

Global Wings 1 班

今回、私は「外国を知る」「視野を広げる」ことを目標にミャンマーとマレーシアの両国について学びたいと思い、研修に参加させて頂きました。“発展途上国”と言われるこの国々に、どのような方が暮らし、どのような生活をしているのか、人々が暮らす環境にとても興味がありました。私は、朝倉市内の保育所に勤めています。グローバル化・多国籍化が進み、朝倉市内にも外国人労働者の方が増えてきています。今後、自分のまわりに関係するとしたらどのような場面だろうと考えた時に、保育所に外国のお子さんが入所してくることを想定しました。その親子は、知らない土地や習慣に戸惑いと不安を抱えてくるでしょう。そこで受け入れ側が相手の文化や言葉等を知っていれば、そこが異国の地でも互いに距離を縮められると思います。異文化を体験する中で、知らぬ間にできた先入観や価値観を見つめ直すきっかけになると思い、今回の研修に臨みました。

保育士という職についていることもあり、研修国の教育機関の視察にも興味がありました。今回の研修では、子どもたちと触れ合える機会を多く頂いたのですが、両国の教育の現場で出会った子どもたちの笑顔がとても印象に残っています。初めて会う私に笑いかけてくれたこと、一生懸命覚えた日本語でコミュニケーションをとってくれたこと、ローマ字で「おはようございます、おげんきですか」と書かれた手紙をくれたこと、忘れることのない思い出となりました。子どもたちのキラキラした目、意欲的に発言する姿を目の当たりにし、とても元気をもらい、自分の考えを人前で堂々と言える環境があることが素晴らしいと感じました。子どもたちだけに限らず、今回の研修で出会った人々はとても温かく私たちを受け入れて下さいました。年齢だけでなく価値観や経験も異なりますが、共に過ごすことの楽しさ、異文化を学ぶことの重要さを知りました。新しい発見ばかりだった今回の旅は、とても濃く、充実していました。

今回の研修で学んだことの中には、企業や宗教についての話など、私の普段の生活の中では関わりがなく無知な分野も多く、一つひとつが新鮮でとても興味深いものでした。「知りたい」と思う自分の思いを大切にしながら、この研修で出会った素敵な仲間たちと意見を出し合い、学び合えたことは一生の宝となりました。最後になりますが、この研修に関わり私たちを支援してくださった関係者の皆様、共に学ぶことができた団員の皆さん、貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

井の中の蛙、大海を知らず

緒方　康起
株式会社福岡銀行　大善寺支店

Global Wings 2 班

今回「福岡県グローバル青年の翼」に参加した理由として、私は総合営業担当として融資だけではなく、法人の抱える課題を一緒に悩み、解決策を考えている。少子高齢化が進み国力の衰退が見込まれる現在の日本では、私の取引先でもよく人手不足や海外進出という言葉を耳にするようになった。その中でも東南アジアが急成長しているという情報を知り、もっと東南アジアのことを知り自分の価値観、視野を広げたいと思ったからである。

まず海外研修ではミャンマー、マレーシアの現状を知り、日本が置かれている状況を知ることができた。私はミャンマー、マレーシアに行く前は心のどこかでミャンマーは農業が盛んなだけでまだインフラ整備も全然進んでいない国、マレーシアについては１０年前に高校の修学旅行で渡航したことがあるが、発展している国というイメージはなかったため両国ともに日本の足元にも及ばないだろうと思っていた。たしかにミャンマーでは道路の舗装等インフラ整備が不十分な箇所は多々あったが、若者の多くがスマートフォンを保有していたことに驚きを隠せなかった。スマートフォンを持っているということは情報を簡単に得ることができるため、勤勉な国民性があるミャンマーは20年もすれば日本と同等もしくは抜かれてしまうんじゃないかという危機感を覚えた。

マレーシアの首都であるKLは、煌びやかな高層ビルが立ち並び活気が溢れており、多くの日系企業も進出していることを知った。地方はまだ高層ビル等はないもののKLだけで見れば福岡だけではなく日本はすでに負けているのではないかと考えてしまうほどであった。またマレーシアは多国籍国家であるため現地の小学校、大学を訪問した際に多言語が飛び交っていた。「英語なんて話せなくても生活できる」という考えがあった私からすれば、急速に進むグローバル化を目の当たりにしたことで、このままでは私も日本も取り残されるという危機感を覚えた。

私は海外研修、国内研修を通して上記以外にも多くのことを学び、多くのことを得ることができた。まずこの研修では他業種で働く社会人だけではなく、年齢も学科も違う学生も参加しており新しい価値観を身に着けることができた。私は社会人として参加させていただいたが普段の生活では会えない方々に会うことができ、国内研修では同じ班やグループの方々と、海外研修では現地の方々や現地で働く日本人の方々と意見交換を行ったことで多様な価値観を理解するという力が身に着いたと思う。

この研修を通して日本国内外の価値観の違う人々と関わったことで「国際的な視野を持ち、職場や団体等で中核となって活躍する青年リーダー」に少しでも近づけたのではないかと思う。

最後に今回の研修で得たことを活かし、日々の業務や地域活動に対して積極的な活動をしていこうと思う。ローカルな視点と今回得たグローバルな視点を合わせたグローカルな視点を持った人材となり、福岡県人として今後福岡県と隣国だけではなく世界を繋ぐことができるよう貢献していきたいと思う。

エネルギッシュなアジアと日本の架け橋

河野　亜美
福岡女学院大学　国際キャリア学部　国際キャリア学科

Global Wings 2 班

グローバルウィングという事業を知ったのは同じ大学の先輩がこの事業に参加していて素晴らしい経験になったというのを教授から聞いたときだ。私は、今まで発展途上国と呼ばれる国に行ったことがなく、自分でアジア＝貧しい・汚い・治安が悪いという固定観念がこの事業に参加する前はとても強かったというのをよく覚えている。しかし、この事業に参加してからはまずアジアという国々をひとまとめにするのではなく、それぞれの国で何かしらの特色があって何かを創造することに特化していることが分かった。

海外研修ではミャンマーとマレーシアに行かせていただき、私のイメージを覆させてくれた。みんなはとてもフレンドリーで政治が多少、不安定であってもみんなが幸せに生活しているのがよく理解できた。日本はすでに先進国と呼ばれる国になってしまっていて政治や経済的な豊かさが人の幸せ度を測るものになりつつある。しかし、ミャンマーに来てからは人の幸せは経済的な豊かさではなく人それぞれが自分の人生に満足しているかどうかまた、どれだけポジティブにそして寛容に相手を受け入れるかによるものではないかと実感した。

マレーシアではミャンマーよりも著しく発展していた。マレーシアにきて印象に残っていることは二つある。一つ目はハラル認証のことである。今回私たちは、ハラル産業公社に行かせていただきハラル認証が食べ物だけではなく化粧品などにもハラル認証が使われていることを知ることができた。また、世界各国ハラル認証のマークには、必ず一文字のアラビア語が書かれていることも日本では知りえなかった情報の一つだ。二つ目は、SEGI大学訪問である。現在私は日本の大学に通っているが自分がなぜ大学にいって何を学んでいるのか分からない状態だった。しかし、マレーシアの学生と交流することで自分の学びたい分野そして、新たな進路を見つけることができた。それはマレーシアの大学でTourism Managementを勉強することだ。私がSEGI大学を訪れて交流した際に実践的、かつ専門的に学べるという環境と授業スタイルにとても感銘を受けた。さらに夕食交流会の時に日本という異なる文化や習慣を優しく尊重してくれて交流会がとても有意義なものになり、私はこのような多文化を寛容に受け入れられる国で観光業の勉強をしてみたくなった。それから観光業に就きたいと思った理由として、他国の文化や習慣を尊重してくれるような国で観光業を学ぶことによって将来、観光業の仕事に就くときに色々な人の背景を考えながら旅行プランナーとして働くことができるからだ。この研修はマレーシアで私の人生を変えるきっかけになった。

今までの研修の中で私は、アジアに対する固定観念と今までの人生観を覆すことができた。このことは私にとって本当に嬉しく、素晴らしい経験となった。この研修を通して私は、観光産業で人の幸せを創造し、アジアと日本の架け橋となる一員になりたいと実感した。

グローバル化社会における「生きる力」を育む

倉吉　孝道
久留米市役所　市民文化部　文化財保護課

Global Wings 2 班

ミャンマーでは、2017年6月1日から始まった進学年度より、JICAの技術協力で開発された新しい1年生用の教科書が全国の小学校に一斉導入されました。2011年に民政移管されたミャンマーで使用されていた教科書は、20年ほど前に軍事政権下で編纂されたもので、暗記中心スタイルでした。そこで、JICAは2014年度から通称CREATEと呼ばれるプロジェクトを立ち上げて、約40名の日本の教育専門家の手によって教科書が一新されました。新しい教科書は、ミャンマーの人々が大切にしてきた価値観を守りながら、多様性を認めて、一人ひとりが自分の目で確かめ、考え、伝え、協力して、自分たちの暮らしや社会を改善していけるようになること、好奇心を膨らませながら楽しく主体的に学べることを目指して作られています。2018年の今年は、新教科書になって2年目であることを知っていた私は、ミャンマーの子どもたちを自分の目で見てみたいという思いがありました。「See Ywar小学校」で披露してもらった「将来何の仕事に就きたいか」ということをテーマにしたダンスに着目。これは、メリトクラシー（能力主義）と職業選択の自由に繋がるもので、子どもたちが夢を持てるようになる未来を感じるとともに学歴偏重主義になるかもしれないという危惧もあり、今後の動向に着目したいです。

一方のマレーシアは、マレー系6割、中華系3割、インド系1割が共存する多民族国家。華人系小学校「SJK（C）Kepong 1」では、子どもたちは主体的に自分の意見を述べると同時に、他者の意見を否定せずに尊重し、話し合いのグループワークでも建設的な対話が繰り広げていました。ICT活用も進んでいて、実写映像やクイズ問題のアプリケーションソフトを投影しながら、デジタルとアナログの良いところを組み合わせた授業が展開されていました。また、「Segi大学」では、いろんな人種の大学生と一緒にテーブルを囲んで、コミュニケーションに関する授業を体験する中で、言葉の壁はあっても、同じ人間だから一緒に学ぶことができて、一緒に笑うことができるという当たり前のことを再認識しました。

私は、18歳の頃から15年間以上、子どもたちの「生きる力」を育むための青少年育成事業を数多く手がけ、現在も10個ほどを掛け持ちしています。同時に、学校や自治体から依頼を受けて、教員や保護者を対象に、教育や子育てに関する講習会を開催しています。私は「世界中の子どもたちに笑顔と夢を」というのが私の使命だと思って活動を続けています。今回の視察で、日本の教育の良いところと、足りていないところを実感しました。この研修で学んだことを自分の活動に活かして、グローバル化社会における「生きる力」を持った子を育てていきます。

新たな一歩を踏み出すことの良さ

高岡　伴成
タカ食品工業株式会社　製造部　包装課

Global Wings 2 班

私が福岡県グローバル青年の翼に参加した理由は、日々の日常業務の中で新しいことを始める行動力や発想力を向上させるためには、もっと様々な経験を積み、私自身の考え方、視野を広げる必要があると思っていたところ、会社から紹介頂いたことがきっかけでした。しかし、年齢的な部分や何も知らない国へ行くことを考えれば、正直参加することに不安はあったが、新しいことにチャレンジしたいという気持ちもあり、参加を決意しました。

研修が始まり、団員のみんなと顔を合わせていくたびに、当初抱えていた不安は少しずつ解消され、海外研修へ行く前の国内研修では、海外の食や文化を学びながら、参加している団員のみんながしっかりとした考えを持って参加していることが分かり、この研修が有意義な研修になることを予感していました。

実際に、海外研修で訪れたミャンマーのオイスカ研修センターでは、団員それぞれが積極的にコミニュケーションを取り、交流会ではミャンマーと日本それぞれの文化を披露することで、楽しい交流会を行うことができました。また、研修センターの研修生たちとの意見交換やミャンマー在住の方々との意見交換では、日本では聞くことができない考え方や価値観を聞くこともできました。ミャンマーに来て、これまでに世界を意識してこなかった自分を悔やみながらも、新しい世界を体験することができたことに喜びを感じています。

クアラルンプール国際空港からの移動中のバスから外を眺めていると、福岡でも見ないおしゃれな高層ビルが立ち並んでおり、マレーシアという国に対して発展途上国というイメージは一瞬で消え去ったのを覚えています。

マレーシアの中華系小学校訪問では、マレーシアは多民族・多言語であることを国内研修で学んでいましたが、実際に授業を見学して、1年生の授業の会話が全て英語で行われていたことに驚きました。現在の日本の教育は、グローバルという視点からすると、遅れている印象を持ちました。小学校訪問の後も、大学で学生たちと身振り手振りを交えながらディスカッションを行えたことは、今までに経験したことが無いことで、新たな刺激を受けることができました。

この福岡県グローバル青年の翼に参加していなければ、生涯経験することが出来ないことがたくさんあったと思うし、これからの日常業務の中で、グローバルという視点で考えたり、行動することは出来なかったでしょう。そう考えると、私にとって未知の世界だった場所へ新たな一歩を踏み出せたことは、大変良い経験であったと思います。

最後になりますが、この研修に携わって頂いた方々、訪問を受け入れて下さった方々へ、深く感謝を申し上げます。有難うございました。

東南アジアの両義性と現状

永岡　拓実
九州大学　教育学部

Global Wings 2 班

クアラ・ルンプールを走る車窓からの景色は我々の心を奪った。過ぎ去る建物のすべてが規格外であり、「東南アジアは発展途上である」という認識を一転させた。団員の目は光り輝き、連日の疲労を一掃した。日本との違いを感じ、感動すると共に、同じ東南アジア内での違いにも驚かされることになる。つまり、我々はこの一週間で、ある意味での“両面”に触れることができたのだ。目覚ましい発展を遂げたマレーシアと、道路さえ舗装されていないミャンマーがひとくくりに“東南アジア”に分類され、「発展したホットな地域」と捉えられる。実情として、「発展した」という地域はASEAN諸国に限定され、それ以外の地域に焦点が当たることは少ない。

「中所得国の罠」という言葉がある。「安価な労働力を活用して経済成長を実現したアジアの中所得国が、産業構造の高度化や技術革新への努力を怠れば、高所得国への移行が困難になる」という考え方である。突きぬけて先進工業国の仲間入りをする際に生じる社会的な課題は、二つ考えられる。

一つは、技術進歩や人材育成、貧富の差の縮小には（再）分配政策の検討を要するが、そうした政策の実施は決して容易ではないことである。

もう一つは、産業構造の変化がもたらす政治的意味である。産業構造の変化は社会的亀裂の変化や社会的ヒエラルキーを構築する。

東南アジアを含む東アジアでは今後も都市化が進み、経済が成長し、中間層・富裕層が拡大するだろう。だがこのことは、国全体の均等発展を意味するわけではない。つまり、常に変化する社会的亀裂と社会経済的欲求、異なった政治システムの在り方は、各々によって異なった帰結にたどり着く。

日本人がもつ東南アジア諸国のイメージは「近年徐々に発展してきている。」とされるが、現状では、東南アジアにおいて「格差」の台頭が顕著である。いくら発展し、GDPが日本に迫る勢いだとしても、ルック・イースト政策に代表されるように、東南アジアの国々が、日本のような先進的に経済を牽引してきた諸外国の政策を手本としていることに変わりはない。一部の発展に重点をおいた“頭でっかちな発展”を続ければ、格差が拡大するだけでなく、日本がたどってきた道を歩んでいくだけであり、将来的に行き着く状態に見当がつく。発展から停滞までを一度経験した我々には、担うべき役割がまだ残っていると考える。今回の研修で、実際に目で見て、肌で触れて東南アジアの現状に触れることができたのは、貴重な体験であった。我々は現地での体験を正確に言語化し、広範囲的に布教していく義務があると考えるきっかけとなった。東南アジアへの関わり方には、未だ議論の余地はあり、我々自身の学びも、まだ始まったばかりである。

身を持って感じることの大切さ

平川　綾夏
中村学園大学　流通科学部　流通科学科

Global Wings 2 班

「世界を知りたいと思ったら、アジアのことについて知りなさい。そして自分の身を持って感じて来なさい」私がこの研修に参加するきっかけとなった恩師がくれた言葉である。

日本人はミャンマーやマレーシアと聞いてまず始めに何を思い浮かべるのだろうか。正直私は瞬間的に頭に思い浮かぶ印象がなかった。どのような国でどのような歴史があり、どのような人たちがいるのか。未知な事ばかりで資料の中での写真や文字でイメージを浮かべることしかできなかった。この恩師の言葉と今回の経験がなければ、私はきっと自分の想像の世界で国の印象を決めつけてしまっていただろう。

今回の研修で自分の肌で体験したことは自分にとってとても良い刺激となった。特にミャンマーでは異文化交流として日本の文化を知ってもらう機会を設けてもらい、二人羽織やコスプレなど日本について新たなイメージを持っていただく機会になった。私自身もミャンマーの歴史や文化に触れ、今までとは違った新たなミャンマーの姿を知ることができた。

将来私が目指している旅行業についてマレーシアではたくさんのお話を聞くことができた。現地で旅行業を行っている方々は皆、異文化と戦いながらも、自分らしく生き生きと働いていて、私もこのように自分らしく生きたいと思った。また、小学生の頃から中国語と英語とマレー語の3ヶ国語を勉強するという教育の発展にはとても驚かされた。これは日本と比べるととても大きな差であり、日本人ももっと世界のことに関心や知識を持つべきだと感じた。日本の歴史や文化を知ることはもちろん大切である。しかし、これから2020年東京オリンピックが行われる日本だからこそ、アジアをはじめとした世界の国々についてグローバルな視点を持つ必要があるはずだ。そして、世界を知りたいと思ってもらうきっかけを作り、その先頭に立って引っ張っていくのが私たち青年の翼の団員でなければならない。私はこの研修で何度も先頭に立って今まで誰もやったことのない新たな一歩を踏み出しチャレンジし続ける方々にたくさん出会い、その少しの一歩が大きく新たな未来への第一歩になると身を持って感じた。

私はこの研修に参加するきっかけをくれた恩師に恩返しするためにも、失敗を恐れず少しずつ新たな一歩を踏み出し、多くの人に私が身を持って実感したアジアの素晴らしさを、ここ福岡から伝えていきたいと思う。

本当の「おもてなし」とは何なのか

八尋　万葉
西南学院大学　経済学部　経済学科

Global Wings 2 班

今後グローバル化していく日本、福岡はどのような政策をとるべきなのか。これが今回この研修に参加しようと思ったきっかけである。日本では2019年にラグビーワールドカップ、2020年に東京オリンピックが開催される。この2大会は世界三大スポーツイベントの２つだ。私はこの2つの大会にボランティアスタッフとして参加する予定であり、そして大会に携わるにあたって島国である日本に生きる一人の人間として世界、そして日本について知るべきだと思ったのだ。

今回訪れたミャンマーではたくさんのおもてなしを受けた。訪問した小学校や村、オイスカ研修センターのスタッフ、出会った人すべてがとてもフレンドリーで、心からの優しさで接してくださっていたのを肌で感じた。しかしミャンマーの人々は優しすぎるゆえの問題もある。ミャンマーではマイクロクレジット事業が盛んだ。ローンを組みスマホやTVを購入し、返せなくなると親戚中、隣近所などみんなが助けようとお金を出してあげる。しかし結局返せなくなり、破綻してしまうというのだ。日本人は親戚、ましてや隣近所の人が困っていても、そこまでの協力はできないだろう。

マレーシアでは夕食交流会でムスリムの青年と乾杯を交わしたことが特に印象深い。事前研修でイスラム教のことについて調べていただけに、この出来事はとても感動した。ムスリムはアルコール製品に触れることさえも禁じられているのに、ビールを持った私のグラスに彼のグラスをぶつけてくれたのだ。この青年に、なぜグラスをぶつけてくれたのかと聞くと「宗教が違うから大丈夫」とのこと。ムスリムの宗教観については個人差も大きいというが、私にとってはとても嬉しい出来事であった。

フリーアナウンサーの滝川クリステルが2013年に行った2020年東京オリンピック招致の最終プレゼンテーションで「おもてなし」について語っている。日本のおもてなし精神をアピールしたものだ。この海外研修を通して日本人が普段言っている「おもてなし」とは何なのかということをすごく考えさせられた。ミャンマーやマレーシアで出会った彼らは「おもてなし」など考えずにごく自然にそれができている。今後たくさんの訪日外国人が予想される日本。本当の「おもてなし」とは何だろう。考えていく必要があるように感じる。

最後に今回の研修に携わっていただいたすべての方に感謝し、今後の大学生活、人生に生かすべく邁進していきます。ありがとうございました。

外国で生活してみて

山中　優貴
九鉄工業株式会社　北九州支店　建築課

Global Wings 2 班

私の勤める九鉄工業は、鉄道にかかわる工事を主体とした総合建設業の会社です。現在、日本の建設業は、深刻な人手不足であり、外国人労働者が年々増加しています。私の配属されている現場も例外ではなく、作業員の中で2割の方は日本国籍ではありません。外国人労働者と共に働く事で、問題となるのが、言語と文化の違いです。その違いについて、直に触れるためにも実際に現地に行き、外国を肌で感じてみようと思い、グローバル青年の翼に参加しました。

研修が始まり、事前学習が行われたのですが、普段の生活の中では見る事も聞く事もない他国の情報に戸惑い、うまくやっていけるか不安になったのが正直な感想でした。しかし、学び、知識を深めるうちに、その不安は消え、宗教に対する信仰の強さ、生活環境など日本とは異なる世界がそこには広がっており、自分の視野が日本しか捉え切れていない事を痛感しました。

実際に海外に来てみるとそれは、さらに顕著なものとなりました。ミャンマーでは都心部にはコンクリート造のビルがあり、道路も完備されており、発展途中である現状を見て取る事ができました。一方で少し離れると、舗装のされていない道路など、インフラが整備されておらず、都心から離れた地域まで計画が行き届いていない現状でした。しかし、そこに住む人々は、自給自足に近い生活を送り、家も木を縛って造ったような家に住みながらも、決して豊かではない生活の中で、現地の人は優しく、楽しそうに生活を送っていました。これは、現世でよい事を行い、来世でも幸せな生活ができるようにという宗教の考え方であり、信仰心の強さに感銘を受けました。

マレーシアでは発展途上な部分はあるものの、日本と比べて遜色ない程の町並みが広がっており、これほどまで発展していることに驚きました。海外で働く日本人の方の話では、ハラルへの申請や現地人と共に働く苦労について学んだと同時に、日本には海外で使えるアイデアの宝庫である事を知る事ができました。

今回の海外研修を経て、海外は予想以上に日本と異なり、文化、言語、生活環境など、共に働く上での問題点が多くあることが分かりました。しかし、それらは相互に理解、互いに歩みよる事で解決できる点であり、日本、あるいは福岡についてもより外国人への配慮、または、積極なコミュニケーションが必要なのだと改めて感じることができました。

新たな扉とその先

河村　梨南子
北九州市立大学　外国語学部　中国学科

Global Wings 3 班

実際の東南アジアを自分の目で見て感じたいと「福岡県グローバル青年の翼」に応募しました。私は中国に約10か月間留学をしました。帰国後、大学で中国について学ぶとき「華人」という言葉にぶつかりました。「華人」と呼ばれる人々は東南アジアに多く住んでいますが、私にとって東南アジアは未知の世界でした。また、私は就職活動を終え春から新社会人です。就職先は東南アジアにも拠点を持っており、東南アジア市場を肌で感じる良い機会にできると思いました。

ミャンマーは、未来に可能性を感じる国でした。オイスカで学ぶ研修生たちは、将来家業に活かす知識や技能の習得のために学んでいます。どの研修生も学びに前のめりで、キラキラしていて眩しいほどでした。農業体験では5つのチームに分かれて、それぞれ違うことを体験しました。私は養豚のチームで豚に注射をしたり、豚の去勢を見学したりしました。日本ではできない衝撃の体験で、普段何気なく口にしている食に対して改めて感謝するとともに、これからを担う人が育っていることを実感しました。

マレーシアは勢いを感じる国でした。首都であるクアラルンプールは高層ビルが立ち並び、何不自由ない都市の生活が広がっていました。また、マレーシアは自分が海外にいることを忘れるほど居心地の良い国でした。その理由は華人小学校訪問ではっきりしました。華人学校ですが他民族の子どももいて、さらに英語・中国語・マレー語を学んでいました。小さいころから他の文化に触れ、共生する術を身につけていることで、外国人に対する構えがなく心地よさを生み出しているのだと思いました。

ただ、両国共に貧富の差はあり、市場や街では物乞いをしている人々も見かけました。経済発展の闇も同時に感じ、発展がすべての人にとって幸福であるのかは疑問が残りました。

国内・海外研修を通して、企業の社長・イスラム教徒の大学生・華人・起業家など普段なかなか出会えない方と話す機会をいただき、自分の中の新しい世界の扉がどんどん開いた気がしています。今までいかに狭い考え方の中にいたかと痛感しました。見て・知って・学んで・興味をもって日々自分を更新することこそ他文化や風習を理解する第一歩になるのかもしれないと気づかされた、期待以上の研修になりました。この学びを活かし、日本や福岡県の一助になれるよう努力していきたいです。

自分にできることとは

貴島　道拓
トヨタ自動車九州株式会社　品質管理部

Global Wings 3 班

私が本研修へ参加した理由は二つありました。一つ目は、アジアの現状を自らの五感で学びたいと思ったからです。自動車産業では、アジアは成長が著しい重要な位置づけになってきています。今回の研修で、アジアに行き、インターネットでは得られない深く正しい情報を学び、得た経験を活かし、所属する企業や団体へ貢献できるようになりたいと考えました。二つ目は、国際的かつ一企業にとらわれない考え方を学びたかったからです。私が所属する団体では、現在、外国籍への方々へ配慮したイベント企画が少ないことが課題となっています。本研修では、世代も経験も異なる人たちと一緒に行動するとで、新たな視点を得ることができれば、今後の人生のかけがえのないものになると思い、本研修に参加しました。

今回は現地へ行く前に、企業・政府・学校に所属される講師の方々から、アジアの歴史や文化について勉強させて頂きました。その学びの一つとして、学校の専門性の高さ、企業の実行力などそれぞれの立場の得意分野があると感じました。私は海外に対して何か行う際は、「いかに得意分野を見抜き、得意分野を活かした連携を促し、成果に結びつけること」が、今後の求められるもののではないかと感じました。

また海外研修でも多くの学びがありましたが、その中でも、一番印象に残ったことは、異なる文化の共存についてです。マレーシアでは、他民族国家でマレー系・中華系・イスラム系が共存していました。子どもの頃から異文化の人々と暮らすことが当たり前です。実際に訪問した小学校では、小学生がマレー語・英語・中国語を話し、抵抗もなく異文化の人と暮らす文化が根付いていると感じました。一方、日本では、外国の方々が増えてきましたが、まだまだ異文化の人を受け入れる文化は根付いていないことが現状だと考えています。そうすると、今後、世界から見ると、アジアの中では日本よりも多様性があり、かつ成長著しいマレーシアの方がマーケットとして魅力的に映るのではないかと思います。こういった現状を踏まえ、私はこのまま日々を何もせずに過ごすだけでは世界との距離が離されてしまうのでないかとの強い危機感を感じました。

今回の研修を踏まえ、私は日本ばかりでなく、もっと世界も見渡したものの見方で考えてもっと学んでいかなければならないと感じました。更に、学ぶばかりでなく、私が研修を通して得た視点や繋がりを活かし、国際交流の企画等を行い、アジアと福岡がもっと繋がりやすくなれる様な行動をして行きたいと思っています。

東南アジアから学ぶ民族共生

高橋　奈歩
福岡女学院大学　国際キャリア学部　国際キャリア学科

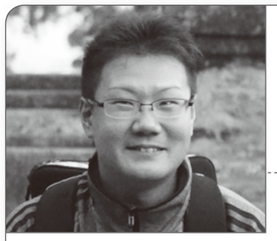
Global Wings 3 班

私は、様々な国の文化、宗教、価値観を理解したうえで、柔軟に、そして積極的に行動することのできる人材になることを目指している。そんな私にとって、日本と歴史的に深い関係にあるミャンマーとマレーシアを訪れ、それぞれの社会や経済、文化について学ぶことができるとともに、現地で実際に活躍されている日本人の方々や同世代の若者と交流することのできる「福岡県グローバル青年の翼」のプログラムは魅力で溢れていた。不安はあったが、自分の理想像に近づける貴重な機会であると確信し、応募に踏み切った。

実際にミャンマーとマレーシアを訪れ、普段日本では感じることのできない「民族の多様性」とその共存、それがもたらす「感受性」や「国際性」に触れることができた。民族融和の歴史があるマレーシアは、多様性を受け入れ、異なる価値観に対する寛容性が非常に高い。このことを特に実感できたのは、華人系小学校を訪れたときである。宗教・民族の違う学生たちが何の違和感もなく楽しく学校生活を送っている姿、学生たちによる息の合った太鼓のパフォーマンスから、服や食べ物、習慣が違っても、マレーシアでは、それが当たり前であり、「違い」はそのまま受け入れられる。「どうして違うか」に言及することなく、そのまま受け入れられる姿勢は多様性の基本であると考える。

日本では、「同じ」ことが常識になってしまっている。そのため、「違う」ということを嫌い、「違う」ことを受け入れにくい。「違う」ことに対し、理由を求められることもあるだろう。これこそ、日本がグローバル化へ進む現代世界で生き抜いていくために、見直さなければならないことであり、民族共生のお手本ともいえる東南アジア諸国から学ぶべきことであると考えさせられた。

今回の研修を通して、異なる年齢、国籍、バックグラウンドを持っている多くの人々と関わることができた。様々な人と関わることで、参加する前と比べ、多面的な視野で物事を見ることができるようになったのではないかと思う。人生の先輩である社会人の方や、良い刺激を与えてくれる国内外の同世代の仲間との素敵な出会いは、私の宝物であり、これからも大切にしていきたいと考える。多様性、積極性を兼ね備えた、グローバルな人材となることを目指し、これからも歩みを続けていきたい。



東南アジアと日本技術の関り

田中　英哲
九鉄工業株式会社　北九州支店　土木課

Global Wings 3 班

私が勤める九鉄工業株式会社では、鉄道工事で培った経験と技術を基盤とし、常に時代のニーズを敏感に捉え、絶えず変革を続け、信頼される企業として社会の発展に貢献することを企業理念として掲げている。日本の鉄道インフラ技術は世界トップレベルであり、今後より一層世界への鉄道技術の輸出が予想され、またその技術を継承していく必要があると考えている。

その中で、私自身が世界で活躍し、知識・技術力を世界に広めていけるような技術者になりたいと考えている。特に今後の経済発展が見込まれる東南アジア諸国においてインフラ整備は活発に行われていくことが予想される中、発展が見込まれるミャンマーと高度な発展の進むマレーシア両国を訪問することは、国際的な視野を広げる絶好の機会であると思い、今回の研修に参加した。

本研修に参加するまでは、訪問する両国の情報はテレビやインターネット等で得られるものしか知らなかった。国内の1次から3次研修において、ミャンマー・マレーシア両国についてのご講演・お話をしていただき、初めて知る情報ばかりで自分自身の情報量の乏しさを実感した。東南アジアとひとくくりにはできない各国に様々な文化・郷土・社会背景があることを知ることができた。

海外研修について、ミャンマーでの都市部近郊において、インフラ整備が急速に進んでおり経済発展の進捗を直に見ることができた。しかし、首都のヤンゴンから一歩離れるとそこには緑が広がり、道路の整備も進んでいない現状があった。オイスカ研修センターにおいて現地の主要産業である農業を体験することができた。現地では農業技術もまだまだ乏しく、日本の農業技術が今後のミャンマーを支える重要なファクターとなることがわかった。マレーシアでは、東南アジア諸国でもシンガポールに次ぐ経済発展を遂げているクアラルンプール市内を視察することができた。クアラルンプール近郊についてではあるかもしれないが、インフラ設備、特に高速道路は日本のそれと比べても遜色なく、また、モノレール等の他の交通インフラも充実していた。かつてルックイースト政策のもと日本へ近づこうとしていた国は、すでにインフラ設備において日本に勝る点も数多くあると感じた。

今回の研修ではとても充実した経験をすることができた。私自身の体で得たこの情報・知識は今後必ず役立つと確信おり、また社内外問わず今後を担う同世代へと伝達したいと考えている。今回の研修を糧にひとりの日本人・福岡県民として、今後世界とどう関わっていくのかをより一層考え、行動していきたいと思う。

一回見ることの価値

中村　晴香
中村学園大学　流通科学部　流通科学科

Global Wings 3 班

ミャンマーの景色とマレーシアの景色。思い出すと同じASEANの加盟国ではあるもののこんなにも差があるのかと海外研修から帰ってきて一番にそう思った。私は福岡県グローバル青年の翼に応募しようと思ったきっかけとして、授業で資料や映像から躍動するアジアのパワーを感じ、インターネットの世界ではなく実際に足を運び、肌で感じたいと思った。そして過去に短くはあるもののアメリカとオーストラリアを訪問してきた。すべて位置している所も違うが生活環境や文化、住んでいる人の価値観も違った。それらを比較して今後の自分の価値観や将来に何か繋げることができればと思った。

国内研修では泊まり込みで研修することにより一度にミャンマーとマレーシアの最前線を知る専門家の方々から話を聞くことができ、大学では聞くことがない情報を自分の知識として取り込むことができた。とても内容も濃く深いものであった。また、食・観光、人材育成・教育の2つの分野に分けて福岡県の今の実態を把握することによってこれからの福岡の課題をも知り、自分がどういう視点で海外研修へ臨めばいいのかを知ることができた。

いざ8日間の海外研修になると両国のエネルギーに圧倒された。具体的に言うと現地の人の生き生きとしているところである。確かにマレーシアよりミャンマーの方が経済的にも貧しく衛生的な面で見ても日本人の自分からすれば悪い。しかし、ミャンマーの人々はたくましく日々を過ごしているように感じた。オイスカ研修センターで話をした研修生はここで学んだ農業技術を自分の家へ持ち帰り親の農業を手伝うことに役立てたい、周りの農家にも広げていきたいと目を輝かせながら話してくれた。日本人で目標や夢について目を輝かせて主張できる人はそう多くはないのに彼らは全員主張していた。マレーシアでも訪問した大学の学生が「なぜ大学に行くのか？」という質問に堂々と答えていた。現地最後の夜の夕食交流会では日本人の方とお会いして話を聞くことができたが彼らもまた同じ日本人なのに生き生きとしていた。

この研修を通して行く前と行った後では両国のイメージももちろんだが日本にいては感じることのなかったことまで感じることができ、吸収できたのではないかと思った。今後自分は進路を決め進んでいくことになるが後悔せず、夢や目標を堂々と人前で言うことができる自分の仕事に誇りを持っている人間になろうと思う。このような経験をさせていただくことができ大変感謝しています。携わっていただいていた方々に深く御礼申しあげます。

現実を知ること

野田　健次
イケア･ジャパン株式会社　福岡新宮ストア　セールス部門

Global Wings 3 班

現在私はイケア･ジャパンの福岡新宮ストアに勤めている。いわゆる外資系企業で、福岡の企業ではない。また、私自身生まれは佐賀出身で福岡の郷土文化、福岡で活躍している企業や団体のことなどあまり知らない。そして、私は今後教えて貰う立場から、人材を育てる立場へと成長していきたいと思っていたところだった。「福岡県グローバル青年の翼」の研修を受けることでこの私の思いを達成できると期待し参加した。

最初の第1次研修では、マレーシアやアセアンの概要、福岡の文化や観光について、ビジネス観点で見る福岡の事、そしてグローバル戦略と人材育成とどの講義も刺激的で興味深いものだった。恥ずかしながら講義の内容で知らない単語も多々あり、理解しようと必死だったのを思い出す。それだけ自分がまだ狭い世界でしか物事を考えてないと痛感し、危機感も感じた。第3次研修ではミャンマーでのオイスカの活動や農業について、マレーシアの歴史から知る多民族文化、そして英語のスピーチ指導と海外研修への期待はどんどん高まっていった。

海外研修では早朝から深夜まで活動し、毎日濃密な時間を団員と過ごすことができ最高な体験だった。見るもの聴くもの全てが初めての刺激で心が躍った。その中でも印象的だったのが、ミャンマーのオイスカセンターでのオイスカ研修生との意見交換会である。研修生のミャンマー人の青年と意見を交わした内容で私が「農家に生まれてこれからも農業を続けていくことをどう思っているのか？」と尋ねたら彼は「自分が作ったものが売れたら嬉しい。これからもっと勉強して農業を続けたい。」と言った。そして彼からは「1日何時間働いているのか？給料はいくらもらっているのか？」とあまりに率直な問いに、彼は生きるため生活するために真剣に考えているのだなと思った。ひたむきな彼の姿勢に、私も真摯に自分の仕事や生活と向き合っていきたいと考えさせられた。

ミャンマーでは出会った皆さん温かく私たちを迎えてくれた。マレーシアでは多民族国家で、それぞれの民族が尊重し合い独自の発展をしていることを直接感じることができた。この研修で己を知ること、他者を知ることが私の目指す人材育成で重要なことと思った。研修で学んだことを大切にして会社や福岡地域のために仕事や活動を行っていきたい。

なぜグローバルになるべきなのか

二嶋　晃平
九州大学　経済学部　経済経営学科

Global Wings 3 班

「グローバルな人材が求められている」、こう言われて久しいと思います。ではなぜグローバルになることを目指すべきなのか。その答えの一つをこの研修は教えてくれました。

私がこの研修に応募したきっかけの一つに福岡をもっと知りたいという気持ちがありました。「福岡でグローバルに活躍する人材」を目指すため、海外研修の他県内フィールドワークなど様々な研修があり、この福岡県を海外という外の視点からだけではなく内の視点からも見ることができると考えたからです。国内研修を通じては現在の福岡のポテンシャルの高さ、これからのさらなる発展に必要なことなどを学びました。

こうした研修を積み重ねながらいよいよ外視点のミャンマー、マレーシアでの海外研修に臨みました。このプログラムでは旅行ではまずない現地の方々と議論する機会が数多くあります。日本人の起業家、マレーシアのムスリムの大学生、華人小学校の校長先生など年齢、国籍、職業などが様々な人たちです。そういった方々の話を聞き、また自分の知らない文化に触れるうちに私自身ある思いが強くなっていきました。それは「こんなに面白いことを知らないままではもったいない」という気持ちです。

私自身、この研修に参加する前は周りの勧めもあり手堅い職業を福岡で見つけ、国内で一生過ごす安定第一の生活を望んでいました。確かに海外を知らずとも国内や自分の故郷で懸命に働き堅実な暮らしを送るのも一つの選択肢です。しかし私は今回の海外研修で数多くの新しい知識や感覚を得ました。そしてむやみに日本にとどまることにこだわりこれらのことを知らないまま生きていくのはただもったいないと感じたのです。そこには知識のほかにも新たな人間関係、ビジネスチャンスなどまず日本にはない「価値」があります。そのチャンスを逃さない、そして自分の学びや仕事に生かす、これこそがグローバルな人間になる意義なのだと今回確信したのです。

とはいえ私は海外研修を終えた今でも福岡県で将来働きたいと思っています。ただしそれはただ安定を目指してのものではありません。グローバルな考え方を持ち、日本にいるだけでは生まれない革新的なアイデアを以て福岡の更なる発展に貢献する人材が今求められていると考えたからです。グローバルであることと海外に移住して仕事をすることは同義ではないのです。そしてそれはこの研修のテーマである“Think Globally, Act Locally”にも合致するのではないでしょうか。

以上のように今回の研修は私の将来に大きな影響を与えたのはもちろん、同じ団員の中で沢山の仲間を作ることができました。仲間と過ごした約1週間はとても楽しく、今思い出すとまるで宝物のようです。また今回の研修を無事終えることができたのは沢山の方々の支えがあってこそです。本当にありがとうございました。今後は私の生まれ育ったこの福岡をより魅力的な都市にするグローカルな人材になりたいです。

アジアの今を感じる

村上　侑希
株式会社福岡銀行　西新町支店

Global Wings 3 班

私が「福岡県グローバル青年の翼」に参加した理由は、世界を知り、自分の視野を広げたいと考えたからです。学生時代にカナダに留学したことがありましたが、銀行員として地元の企業と関わるうちに、福岡にとって重要なのは欧米よりも近隣のアジア圏の国々だと感じ、アジアの文化や経済状況を学びたいと考えました。

国内での研修を経て臨んだ8日間の海外研修は毎日が刺激的で充実した時間でした。はじめに訪れたミャンマーは、どこか雑然とした雰囲気がありました。とても活気にあふれていて、首都のヤンゴンなどは予想していたよりもずっと都会的な街並みでした。一方で、農村部は道路の舗装もなく竹作りの家に暮らしている人々もいて、地域によって近代化に大きな差があると感じました。驚いたのは、そんな農村部でもほとんどの人がスマートフォンを持っているということです。ミャンマーのような発展途上国ではインターネットが普及しておらず、先進国との間に情報格差があるのではと思っていましたが、実際はここ数年で大きく変わってきているようでした。

次に訪れたマレーシアのクアラルンプールは首都でもあることから経済発展が著しく、予想を越えた街の華やかさに圧倒されました。また、華人系の小学校で授業を見学させてもらいましたが、多民族国家であることから言語教育は日本よりもハイレベルでした。1年生の英語の授業では、中国語を母語とする子どもたちが英語の先生の言葉をしっかり理解し、我先にと手を挙げて積極的に発言していました。授業の内容も教科書をただ読むのではなく、子どもたちの興味を引くように映像や音楽を活用し楽しく学ばせようという姿勢が感じられました。マレーシアの人々はマレー語、中国語、英語と複数の言語を当然のように使い分けます。グローバル化社会の中でこの言語力を持つマレーシアの将来にどこか末恐ろしさのようなものを感じました。

今回の海外研修では、実際に現地を訪れてその国の方々とコミュニケーションをとることで、インターネット等では知りえない部分に触れることができ、とても貴重な体験をさせていただきました。また研修中にお会いした日本人の方たちは、とてもポジティブで自分の仕事に誇りを持ち、新しいことに恐れずチャレンジされていて、とても刺激を受けました。私も今回学んだことを業務に活かし、将来は福岡とアジアの発展に貢献できるよう日々邁進したいです。

事務局から一言

半年間の研修を終えて

福岡県青少年育成課　**藤川　為廣**

↑左端（藤川　為廣）

平成30年度の「福岡県グローバル青年の翼」は、9月から3月末までの半年間にわたり実施してきました。この事業は、前身の事業から数えて48年目となる長い歴史を持つ事業です。時代の流れと共に内容を少しずつ変えながらこれまで多くの団員が参加し、今年も24名の団員が参加しましたが、この歴史の中に私自身も2年にわたり担当として携われたことは大変光栄でした。

そして、彼らのために、国内・海外の研修で貴重な講義を頂いた講師の皆さま、フィールドワークにご協力を頂きました皆さま、視察を快く引き受けて頂いた皆さま、また、この事業を様々な形でご支援を頂きました皆さま、本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。是非、今後の彼らの成長を温かく見守って頂ければと願っております。

そして、24名の団員の皆さん、半年間にも及ぶ長い研修期間の間、よく頑張ってくれました。国内での3度の宿泊研修では多くの講義とグループワークがありました。海外の研修においても、連日早朝から深夜まで多くのイベントが計画されかなりの密度で研修を行いましたが、その全ての研修において、皆さんはチームとして果敢に挑んでくれました。人生の中ではたった半年間ですが、大きく成長されたのではないでしょうか。

今年の海外研修の地は、ミャンマーとマレーシアの2カ国でした。世界で多くの国がある中でたった2カ国、1週間程度の訪問でしたが、これまでの人生の中でも比較できないほど貴重なものばかりだったと思います。

それぞれの訪問地については、事前にインターネットや写真などで情報を目にしたことがあったと思いますが、実際に訪問し時に感じた匂いや、温度、対面しコミュニケーションして得られる考え方の違いなどは、自身の想像以上だったのではないでしょうか？

私自身、今回のミャンマー訪問で大変感動したことがありました。現地ではオイスカ研修所が支援している村や学校を訪問しましたが、どちらの訪問先も、そしてその移動中でさえ、村人や行きかう人々が我々を歓待してくれました。あのような歓待を受けることができたのは、これまでオイスカの皆さんが長きにわたり地道に現地の皆さんの理解を得て、その住民にとって本当に感謝される事業を丁寧に続けてきたからにほかなりません。団員の皆さんも今ならこれがどんなに凄い事かが分かると思います。

私もこれまで多くの国々を訪問し、年単位で滞在した事もありますが、まだまだ新しい経験や価値観の違いに遭遇します。そして、こうした体験が、自分の思考に幅を持たせ、さらなる成長につながるものになると確信しています。

団員の皆さんも、是非これからも視野を広く、何事にも好奇心を持ってチャレンジし続けてください。そして、自身の活動される場でご活躍頂きたいと思います。

第３回 福岡県グローバル青年の翼（2018）　グローバル＆ローカル・リーダーシップ・プログラム

募　集　要　項

１．目　　的

県内青年に、世界（アジア）を舞台に県内の企業や自治体が活躍している現状を体感、認識させることで、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核的存在として地域で活躍できる人材を育成する。

２．主　　催

福岡県グローバル青年の翼実行委員会（以下「実行委員会」という。）

３．事業内容

（１）募集人員　２４名

（２）全体の研修スケジュール

① **第1次研修（宿泊）**…９月８日（土）～９日（日）
郷土の歴史・県内企業の海外展開・国際協力活動・県の施策等についての講義等

② **第2次研修（フィールドワーク）**…①と③の間の任意の日
海外訪問先に関連する県内企業・団体等の視察

③ **第3次研修（宿泊）**…１０月２０日（土）～２１日（日）
訪問国及び訪問先に関する講義・海外視察先選定・英語スピーチ指導等

④ **第4次研修（海外研修）**…１１月４日（日）～１１日（日）
現地企業や産業インフラ、NPO法人、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設の視察・体験、現地で活躍する日本人などとの交流等

⑤ **第5次研修（宿泊）**…１２月８日（土）～９日（日）
海外研修レビュー・NPO法人活動講義・事後フィールドワーク企画等

⑥ **第6次研修（フィールドワーク）**…⑤と⑦の間の任意の日
これまでの研修を受けての県内フィールドワーク

⑦ **報告会**…３月中のいずれかの日曜日（予定）
研修成果報告会

※研修日程については、研修効果を高めるため変更になる場合があります。

（３）海外研修

日時　平成３０年１１月４日（日）～１１日（日）　７泊８日
訪問先　マレーシア（クアラルンプール）、ミャンマー（ヤンゴン・バガン・パコック）
※訪問国（都市）は、変更になる場合があります。

※ 海外研修の内容について

①目　的

産業・ビジネス・文化・社会貢献活動等の分野で、発展し続けるアジアの現状を体感するとともに、福岡（日本）が海外に打って出る姿を学ぶことにより、国際的視野を身につけ異文化交流について理解を深める。

②研修内容

・現地企業や産業インフラ、企業、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設、社会貢献活動視察、現地で活躍する方との交流会等
例：都市計画・インフラ・工業施設・現地企業の視察・訪問、多民族融和（ムスリム政策）・文化施設等の視察、日本や現地NPOの社会貢献活動の視察・体験、夕食交流会の開催

４．募　　集

（１）**募集人員**　２４名
（２）**募集締切**　平成３０年６月２８日（木）
（３）**応募資格**（①～④のすべてに該当する者）

① 県内居住者で、平成３０年４月１日現在、満１８歳～３５歳の者
（昭和５７年４月２日～平成１２年４月１日生まれの者）

② 企業・大学・青少年団体・NPO団体・自治体等に所属・在籍する者で、国際的な視野を持ち、職場や団体等の中核となって活躍する人材を目指す者

③ 過去２年間（平成２８年度以降）のうちに国・地方公共団体等の公的経費（一部助成を含む）によって海外派遣事業に参加した経験のある者、国又は地方公共団体の議会の議員の職にある者は除く。

④ 健康状態等
・健康で協調性に富み、研修計画に従い海外研修等の活動が支障なくできるとともに、規律ある団体生活に耐えられる者
・第１次研修から報告会までの全てのプログラムに参加できる者

５．応募方法

下記の書類をとりそろえ、６月２８日（木）までに実行委員会事務局へ直接申し込むものとする。郵送可（当日消印有効）。住所は「10．問い合わせ先」参照のこと。

① **参加申込書**･･･様式１
② **返信用封筒**（定形郵便のサイズで、住所、氏名を明記上８２円切手を貼付）
③ **推薦書**･･･様式２
（参加者の所属する団体内の関係者による推薦とする。ただし、参加者の親族や友人による推薦は認めない。）
④ **勤務先所属長の承諾書（ただし被雇用者のみ）**･･･様式３
⑤ **作文**
この研修で何を学びたいか、研修後、成果をどのように活かしたいか等を具体的に記述すること
・パソコン、ワープロを使用し、1,200字程度にまとめること
・縦Ａ４判横書きとし、タイトル及び氏名を明記すること（タイトルは自由）
⑥ **保護者の同意書（ただし4月1日現在で20歳未満の者のみ）**
･･･様式４

※上記データは、福岡県庁ウェブサイトよりダウンロード可能です。
「福岡県グローバル青年の翼」にて検索ください。

６．団員候補者の選考、決定

（１）団員候補者の選考

実行委員会において、第１次選考（書類選考）を行い、結果を７月上旬までに本人に通知する。

書類選考の合格者については、７月８日（日）（予定）に第２次選考（面接）を実施し、８月初旬までに内定者を決定し本人に通知する。

（２）団員の決定

団員の決定は、第３次研修まですべて出席し、かつ団員としてふさわしいと認められる者について第３次研修終了時に行う。

※不適当と思われる者については、それ以後の研修参加を認めない。

７．経費・損害等の負担

（１）次に掲げる経費については個人負担とする。

負 担 金	その他の個人負担経費
社会人 120,000円	県内研修に係る経費（交通費、食事代、宿泊費）、パスポート取得に係る費用、旅行傷害保険料、海外研修に係る経費（県内旅費、一部の食事代・交通費等）
学生 100,000円	

（２）負担金は、10月に実施予定の第３次研修前までに納入するものとし、納入後は原則として返金しない。なお、負担金納入の有無に関わらず、団員が自己の都合により辞退した場合に生じるキャンセル料等については、本人が全額を負担するものとする。

（３）研修中の災害、病気、事故、個人の不注意等で主催者の責めに帰さない理由によって生ずる団員の損害等については、主催者は責任を負わないものとする。

８．団員資格の取消し

（１）団員として不適当と認められる者（研修の無断欠席、悪意を持って研修活動を妨害する者など）については、団員資格を取り消すものとする。また、海外研修中における資格の取り消しは団長が行い、速やかに帰国させるものとする。
（２）海外研修中に団員の資格を取り消した場合における帰国に要する経費は、取り消された者の負担とする。
（３）上記二項のいずれかに該当した場合、すでに実行委員会が負担した経費の一部または全部を取り消された者から返還させることができる。

９．事後活動

当事業に参加した団員は、これまでの事業参加者で組織している「福岡県青年の会」に入会し、積極的に会の活動に関わっていくことが求められる

問い合わせ先
福岡県グローバル青年の翼実行委員会事務局
〒812-8577　福岡市博多区東公園７番７号
福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局　青少年育成課内　電話 092-643-3387

Special Thanks to

国内研修の講義・視察などでお世話になった皆様

研修	氏名	所属	
第1次研修	北見　創 様	日本貿易振興機構（JETRO）	アジア大洋州課
	占部　賢志 様	中村学園大学	教授
	神田橋幸治 様	ビジネスデザインラボ	代表
	田中　克明 様	田中藍株式会社	専務
	辻　史郎 様	株式会社辻利茶舗	代表取締役
	豊島　茂 様	公益社団法人福岡県観光協会	観光推進プロデューサー
第2次研修	豊島　茂 様	公益社団法人福岡県観光協会	観光推進プロデューサー
	津留佳奈恵 様	福岡地所株式会社(キャナルシティ博多)	キャナルシティ博多事業部 広報･インバウンド担当
	前川　修一 様	私立明光学園中・高等学校	日本史
	松下あかね 様	株式会社麻生	経営支援本部総務人事部
第3次研修	彦坂　延良 様	公益財団法人オイスカ西日本研修センター	研修課長
	長根　寿陽 様	株式会社メディカルグリーン	開発事業室室長
	W.Y. LIM 様	L&L　CONSULTANT	Founder & Director
	Aldo Bloise 様	IT & IP Strategy Advisory	Deputy General Manager
	Joelle Bloise 様	IT & IP Strategy Advisory	General Manager
	水谷みずほ 様	合同会社みずトランスコーポレーション	代表取締役　社長
	花野　博昭 様	合同会社みずトランスコーポレーション	代表取締役　副社長
第5次研修	たいら由以子 様	NPO法人循環生活研究所	理事長
	徳丸　純一 様	グローバルイノベーション事業協同組合	専務理事
	竜口　英幸 様	ジャーナリスト・米中外交史研究家	
第6次研修	Syazleena Ghani 様	SEGI University & Colleges	Student
	Anisa Areeji 様	SEGI University & Colleges	Student
	Nur Afiqah bte Zainal Abiddin 様	University of MALAYA	Student
	Peggy Liong Pei Chyi 様	University of MALAYA	Student
	Wan syafiqah Amalina Binti wan Badruddim 様	University of MALAYA	Student
	Wan Nur Amirah Binti wan Roshi 様	University of MALAYA	Student
	寺戸　洋介 様	福岡工業大学附属城東高等学校	国語（現代文）

海外研修の視察・交流会などでお世話になった皆様

氏名	所属	
木附　文化 様	オイスカ研修センター(DOA OISCA Intarnational)	
西垣　充 様	ジェイサットコンサルティング	代表
野田　勝也 様	福岡市	ヤンゴン市　まちづくり協力支援アドバイザー
堤　雄史 様	SAGA国際法律事務所	代表弁護士
尤 進來(Yew Chin Lai) 様	Kepon SJK(C)	校長
Datuk Musa Yusof 様	Malaysia Tourism Promotion Board(マレーシア政府観光局)	Senior Director
尼田　和孝 様	オタフクソース　マレーシア	Director - Executive Advisor
Mohamad Romzi Sulaiman 様	Halal Industry Development Corporation(ハラル産業開発公社)	Senior Manager
Moses Ling Wei 様	SEGI University & Colleges	Executive Vice President
陳　素珊 様	Apple Vacation	
W.Y. LIM 様	L&L　CONSULTANT	Founder & Director
小山　真一 様	在マレーシア福岡県人会	副会長
クアラルンプールの夕食交流会にご参加いただいた皆さま		
オイスカ研修センターの皆さま		
Kepon SJK（C）学校、生徒の皆さま		
マレーシア政府観光局の皆さま		
ハラル産業開発公社の皆さま		
在マレーシア福岡県人会の皆さま		

福岡県グローバル青年の翼にご協力をいただきました全ての皆さま、

団員一同、心より厚く、熱く御礼申し上げます。

Snapshots with Message

1班 Snapshots with Message

江頭　一記　Profile p30

仲良くなったパン工場の先生と。一緒に作ったキャロットケーキはふわふわでした。

柏原　智香　Profile p30

公園で売られていたゴム仕掛けの鳥。リムさんに教えてもらった飛ばし方で力強く羽ばたいた。簡単な仕掛けに見えても、日本ではあまり作られないおもちゃだ。

グローバルな活躍とは何だろう。簡単そうに見えることでも着実に行動に移すことの積み重ねではないだろうか。世界に立つためにははじめの一歩が必要だ。小さくてもその翼の羽ばたきなしに、大海原へ漕ぎ出すことはできないのだから。

河村 健利　Profile p31

ミャンマーの圧倒的な大きさと輝きを放つパゴダでの1枚。

日本では見る事のできない大きさと輝きに、現地でしか感じる事のできないエネルギーを感じた。

北村　空　Profile p31

どれも中華風なうまいごはん！

城戸　夏葵　Profile p32

みんなで買い物！
ハイ、チーズ^^;

佐々田　拓実　Profile p32

ミャンマーのパゴダが見渡せる丘での一枚。

青い空に緑の大地、日本では見られない風景はまさにインスタ映え!!

歴史的なパゴダの数々を見渡す大パノラマは圧巻でした。

竹井　大善　Profile p33

ペトロナスツインタワー前で団員のみんなと。

煌びやかな高層ビルが立ち並ぶ近代都市クアラルンプールは、躍動するマレーシア圧倒的なパワーを肌で感じることができました。

田島　里歩　Profile p33

マレーシア華人系小学校での一枚。授業中、積極的に自分の意見を発言していたのがとても印象的です。現地で覚えた挨拶を交わし合いながらコミュニケーションをとった楽しい時間でした。みんな笑顔が可愛い…。元気いっぱいでした！

2班 Snapshots with Message

緒方　康起　Profile p34

オイスカ研修センターにて畜産体験の1枚。
豚肉を美味しくするために、生後１週間の子豚に去勢を行います。その時の子豚の断末魔が忘れられません。

河野　亜美　Profile p34

SEGI　Universityの生徒とマレーシアでの夕食交流会の時の一枚。
マレーシアの学生とたくさん話して交流を深めることができた。
お別れの時は泣いてしまった。

倉吉　孝道　Profile p35

ミャンマーのオイスカ研修センターに併設する保育所。
視察訪問先ではありませんでしたが、子どもが大好きなので飛び込みました！
怪獣役を演じて四つんばいになって追いかけ回すと、「キャー！」「ギャー！」と言いながら逃げ回る子どもたちが可愛かったです♪
世界中どこの国でも、子どもの笑顔はその国の宝だと思います。

高岡　伴成　Profile p35

ミャンマーの小学校訪問での集合写真。
『タナカ』を塗った子どもたちは、めちゃめちゃ可愛く、そしてなによりも子どもたちの笑顔は最高の贈り物でした!!

永岡　拓実　Profile p36

今後の我々の活躍に期待。「飛び立て青年の翼！」

平川　綾夏　Profile p36

ピンクモスクの前で大ジャンプ！！！
お参りの影響で中に入ることはできなかったけど、天気も良くて最高でした！

八尋　万葉　Profile p37

スーツと村のマーケットというアンバランスさがお気に入り。
個人的にはいろいろな思い出が詰まった一枚で記録に残そうと思いました。(わかる人にはわかる)

山中　優貴　Profile p37

どんな事よりも一生の仲間と出会って、一緒に経験をできたことが一番嬉しいです。

3班 Snapshots with Message

河村　梨南子　Profile p38

華人小学校での1枚。
みんなの協力で盛り上がったステージ！げんき〜〜‼
個人的には中国語を使う機会も頂いて、ドキドキした数時間でした。

貴島　道拓　Profile p38

ミャンマーでの朝市の一面。
都市部以外は、交通環境が整っていない場所が多々あった。その厳しい環境でも，自分が作った車がぼろぼろになりながらも人々の足となり、人々の生活を手助けしていた。
そんな誇らしく素晴らしい一面を実感することができた貴重な一時でもあった。

高橋　奈歩　Profile p39

ミャンマーという日本から遠く離れた国で、日本米を見ることができてとても感動しました。

田中　英哲　Profile p39

ヒンドゥー教寺院のあるバドゥ洞窟の入り口での一枚。ヒンドゥー教寺院でありながら、イスラム系の服装をした観光客も多くおり、マレーシアの国民の他宗教に対する寛容さを目の当たりにした。

Snapshots with Message

中村　晴香　Profile p40

ミャンマー・オイスカ研修センターの夕食交流会での一枚。人生初のコスプレ（猫娘）をし、いつもはまじめな彼らもノリノリで写真撮影に応じてくれました！ミャンマー語は分からないけどいい経験になりました！

野田　健次　Profile p40

華人系小学校での3班の出し物のファッションショー終了後。
皆で協力して楽しくやり遂げた！
サムライ魂は伝わったかな！？

二嶋　晃平　Profile p41

ミャンマーでの夕食を撮影した1枚。
ミャンマー・マレーシア共に料理は日本に比べてスパイシーで食欲を刺激するものばかり。
辛いもの好きにとっては食べすぎ注意でした！（笑）

村上 侑希　Profile p41

ミャンマーの寺院にて。民族衣装のロンジーがカラフルでかわいい！

MEMO